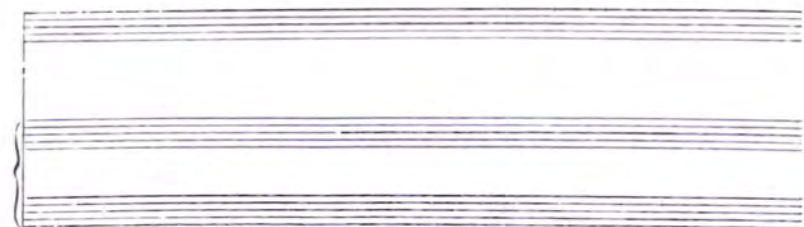
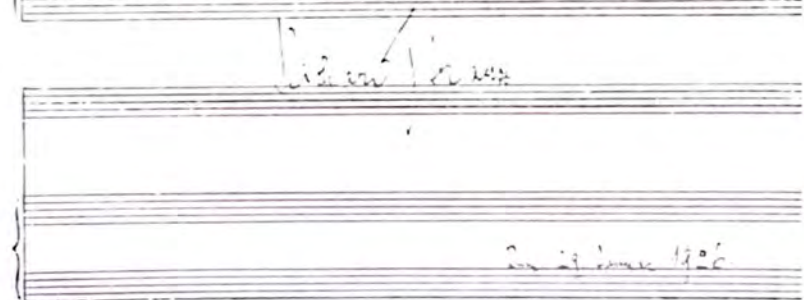
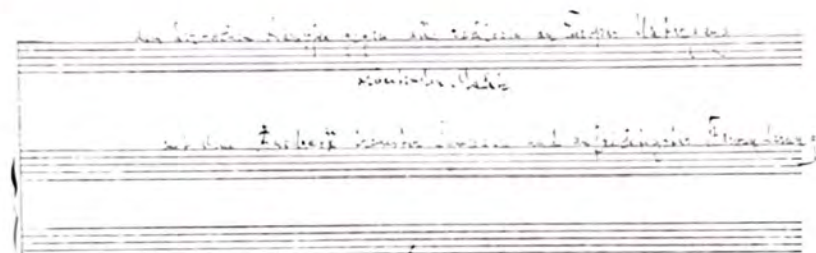
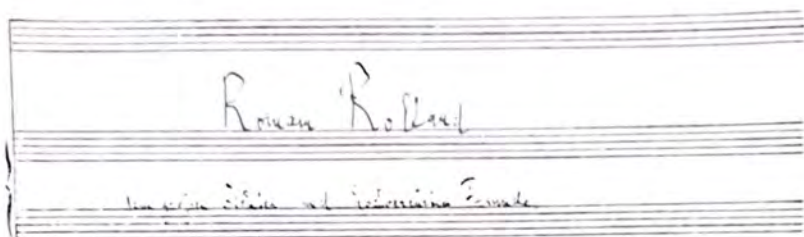


ユニテ

1996.3

23

ロマン・ロラン研究所



表紙 リヒャルト・シュトラウスの楽譜

ロランの60歳の誕辰を祝うため、スイスで出版された「ロマン・ロランの友らの本」Liber amicorum Romain Rolland (1926)のなかにあるリヒャルト・シュトラウスの頌敬の3ページ。

この本の編集代表者はゴルキー、デュアメル、ツヴァイクの三人で、アラン、アインシュタイン、ガンヂー、ヘッセ、マサリック、シュヴァイツァー、シュニッツラー、タゴール、ウェルズ、ウナムーノ、トラーなどにならんで、片山敏彦、高田博厚などの寄稿文もある。

第1頁はロランへの献辞、つづいて、ゲーテの「西東詩篇」の一つへの作曲である。(裏表紙からの2ページ。1925年作曲)

目次

| | | |
|--------------------------|------|----|
| 私の歩んだフランス文学の道 | 片岡美智 | 1 |
| ロマン・ロランとシュトラウスの周辺 | 岡田暁生 | 15 |
| ロマン・ロランと日本人たち(2) | 小尾俊人 | 30 |
| ロマン・ロランの面影 | 落合孝幸 | 42 |
| 上田秋夫 追悼 —— 詩人 上田秋夫の青春 | 永田和子 | 53 |
| ベートーヴェンで死ぬことについて | 浜田陽 | 59 |
| 阪神大震災によって再びロマン・ロランと…… | 島谷亜希 | 65 |
| ロマン・ロラン研究所の活動 | | 67 |
| 1995年度 賛助会員、寄付者名簿 | | 69 |
| あとがき | | 70 |

私の歩んだフランス文学の道

片岡美智

「ボールとヴィルジニー」この作品が私にとって最初の仏文学との出会い——。小学四年の私はあてがわれる子供向けの本に飽きたら「おとなの本は読んではいけません」との母の言いつけにそむき、奥座敷の床の間の角に隠れて母の愛読している婦人之友に連載の可憐な少年と少女の田園生活の挿絵に見とれるのであった。その私が決定的に私を仏文学に結びつけることになるパスカルには十年後でないと会えないのである。

祖父健吉以来クリスチャンである家庭で育った私は自分の将来についてこれといった考えもなまま米国系ミッシェル・スクール女子学院、東京女子大学へと進む（両親は私が英語教師になることを期待していたのだろう）。ところが女子学院の卒業式に代表として暗誦させられた詩の内容には無関心で、詩人の名ロングフェローしか覚えていない私には東京女子大英語専攻部のテキストは興味がなく、殊に東京大震災（大正十二年九月一日）で九死に一生を得て人間とは何か真理とは何かについて考えこむようになり、安井哲学長のご厚情にすがって文学部哲学科へ移ってしまう。一年目にフト図書室で見つけて借りた「ジャン・クリストフ」に夢中になって中央線の座席の角で読みふけり、降りるはずの新宿駅を通りすぎて終点の東京駅でハッとわれに帰った瞬間のことは忘れ難い。が、この時のロマン・ロランとの出会いは一時的のもので、訳者の豊島与志雄氏の方に私は後にたいへんお世話になる。

この大正十三年頃にはマルクス主義運動が活発になるのに対して、哲学界では東京帝国大学（現・東大）と京都帝

国大学（現・京大）で著名な哲学者が輩出する。ドイツ哲学の研究が盛んで、東京女子大での私の卒論は指導教授の意向に基づきカントの「純粹理性批判」に関するもの。その私は幸運にもドイツでフッサールに師事して帰国されたばかりの山内得立先生の現象学についての講義に出席でき、更に少し遅れてドイツでハイデッガーに師事して実存哲学を学ばれた三木清先生が帰国され、お会いする機会に恵まれる。この時期に現象学と実存哲学が何か一応知ったお蔭で、十年後（一九三四）にベルリンのフランス学院研究生となつてこの二人のドイツ哲学者に師事したサルトルが書き上げる大作「存在と無」（一九四六）の中に「現象学的存在論の試み」とか、人間とは「実存が本質に先立つ存在である」といった表現を見つけた時、私は嬉しい驚きを味わつた。

三木清先生については新宿の中村屋二階の喫茶室で向かい合つてコーヒーをいただいたほかに、第二次大戦の直後に西ドイツで、ある国際会議の帰途ハイテッガー氏のご自宅を訪ねた折、氏がニコリして「ミキのことはよく覚えてゐる」とフランス語で私に言われたのも懐かしく思い出される。が、これらの思い出とは別次元で三木先生が私にとつて特別の恩人なのは「バスカルにおける人間の研究」（一九二六）の著者だからである。「真理は必ずしも矛盾しなくはない。矛盾は必ずしも真理でないことを意味しない」といった言葉が私を捕えた。現在の私はこの定義こそ「実存主義」が提唱する両義性ではないかと驚嘆する。こうして私はバスカルに導かれてフランス文学の道の第一歩を踏みだしたのである。

しかし「残念！」と言うべきか「当然！」と言うべきか、私の長い人生の途上では突然、方向転換が幾度となく起こる。（この現象は精神分析の観点からすれば極端へ走る型の私の進路にとつて不可避なのかも知れないが。）実は私が女子学院二年生の時家族が東京を去つてからは私の寄宿舎生活が続き、私は思う存分読書、思索、勉学に没頭しつゝ日夜を過していたのである。そうした私が大学の卒業が間近なある朝目が覚めた瞬間、「これまで生きてきたのは私の頭だけだ、

この個室の中で「今こそ私は街頭へ出てゆくべきだ！」という考えが浮かぶ。そうなるとグズグズしてはいられない私、行きつけの神田の古本屋を呼んで部屋中の本を持って行ってもらう一方、朝刊の朝日新聞求人案内を手に就職口を見つけに出かけた。「女子大卒？こりゃ愉快！」と直ぐ雇ってもらえたのが、なんと皮肉！新宿の紀伊国屋書店！店先にはちょうど世に出た円本（二冊一円）が山と積まれ、赤い表紙にふさわしく左翼作家の名がズラツと並んでいる。午後八時閉店！するとまだ帝大生の舟橋聖一氏の仲間が集まって店主の田辺茂一氏（慶応出身）と同人雑誌「朱門」のことなどで話しあいが始まる。こうして私は本と雑誌にとりかこまれながらフランス文学には縁がない。ある晩近くの大衆食堂で私が女友達とビールで乾杯をしているところを店主の父上が見かけたとかで翌朝店主の部屋へ呼びつけられ、「女のくせに、ビールを飲むとはけしからん」と解雇を言いわたされる。「なーんだ、口では進歩的なことをしゃべりながら本心はなんて古臭いんだ！」とあいそが付き、左翼作家藤森成吉氏が私の弁護を引き受けて下さったのに元のさやにおさまる気にはなれず、ブラブラしながらも東京女子大時代にパスカルとの出会いで始まったアテネ・フランセの授業は受けていたようだ。しかも私のほかにたった二人（岩倉具実氏と新庄嘉章氏）しか学生のいな山田吉彦先生のギリシャ語のクラスにまで私は顔を出していたとみえ、この山田先生（戦後のベン・ネームがきた・みのる）の紹介で神田小川町の仏蘭西書院に勤めることになり、こんどはフランス書籍と向かいあいの毎日である。それなのに私が読んだのはたった一冊、「ラ・ギャルソンヌ」（女性解放をとらえたヴィクトル・マルグリットの小説）！私自身文字通りボーイッシュ・カットのモダン・ガールだったのだから。（この作品を勧めたのは後日パリでお会いする松尾邦之助氏の令弟正路氏で後に小樽の大学教授。）顧客ではキモノ姿の堀辰雄氏、ベレー帽の滝口修造氏などの書棚の本を見つめて立っておられる様子が今も見えてくる。ある日礼服用の縞ズボンをはいた口ひげのあるハンサムな中年紳士から「フランスの婦人運動に関する薄い本を訳してみませんか」と話しかけられる。それからの数年間親しくつきあうことになるこの人は帝大法学部出身、フランス労働法が専門なので官庁の任務をおびて幾度か渡仏の機会をもち、

大のオペラ・ファンで、ロマンチスト。帰国中は立教や法政の講師でもある関係でこの頃日本国内で初めて法政の文学部仏文科が女子に本科生としての入学を許可したことが解り、これでようやく私の前にフランス文学の道が開かれた。当時の仏文科科長が豊島与志雄先生なのである。

私の長い人生の途上で「二十代は恋愛至上主義の時代だったな」と現在の私は微笑ましく思うと同時にラムールはフランス文学の主要なテーマの一つであることも改めて痛感させられる。あの頃の私はジョルジュ・サンドに憧れていたのだから。「生きていること、それは私にとって、愛することである」この強烈な愛の宣言に私は共鳴してしまった。正にこの言葉で、サンドが中年以後パリを去りシヨバンとも別れて故郷ノアンにおちついてから完成した「私の生涯の物語」は書き始められているのだ。永年来の念願が四年前（一九九一）の秋に叶ってノアンの邸内にたたずんだ私は万感胸に迫る思い！サンドの墓前で時の経つのを忘れた：若き日の彼女がミュッセとの恋愛に悩んで書いた「ある旅人の手紙」（愛の理想像としてフィレモンとポシシスの生涯が羨望の気持ちを含めて語られている）を翻訳して豊島与志雄先生に見ていただいたのがツイ昨日のことのようだ！私より一年以上級の蛭原徳夫氏はこの頃もうロマン・ロランと取り組んでおられたと思うが私の卒論のテーマは、どうしたことか、スタンダールの「赤と黒」と「バルムの僧院」の主人公ジュリアンとファブリスを対象としての人間像の比較分析。一体全体私はどこでどのようにこの二つの作品と出会ったのだらう？…何の記憶も甦ってこない。けれどとにかくこの時からスタンダールがパスカルと共に私の人生にとって貴重な存在となってしまう。論文のテーマを仏語でまとめたものをもって私はパリへ向かうことになるのだから。

昭和十四年（一九三九）三月私が法政を卒業するこの年から仏国政府給費留学に女子の応募が許可されて物理学専攻の湯浅年子氏と私が合格。九月初め第二次大戦勃発のため私のパリ着は翌年の一月末日。それから満十年間ソルボインヌの二人の教授（主論文「スタンダールにおけるエゴチスム」の指導教授ジャザンスキー氏と副論文「ゲートとスタンダール」の指

導教授カレ氏)の推薦状に従つて私の留學費は(獨軍占領時代、解放後も)毎年更新される。スタンダールにバック・アツプされているお蔭と言わねばならないだろう。そして論文提出後も「絶対に日本へは帰らない」覚悟でいる私を日本に連れ戻したのが(後述するように)パスカルなのである。

フランスへ発つ前に未知の方から頂いた手紙にバリでの心得として、ここは昔からラムールの都なのだから「ロチの処女作『アジアデ』を熟読玩味しておかねばなりません」とあり、早速私はこの作品を介してロチにも親しむようになる。この手紙の主がバリの大都市に日本館を寄付された薩摩治郎八氏。当時箱根の別荘で静養中の薩摩氏は間もなく渡仏、そして解放までは自由地帯にとどまり、バリへ移られると留學生の私の身を案じて大都市総裁オノラ氏(前文部大臣)へご挨拶にうかがうようお勧め下さるばかりでなく、ご自宅やニースの別荘へもお招き頂くことになる。

四十日間の船旅が終つて上陸したマルセイユ港に、思いがけなく、既に着いておられた薩摩氏が出むかえて下さりバリ行き列車に乗せて頂く。こうしてやつとの思いでたどり着いたバリ！それは燈火、食料、交通のすべてが管制・統制下のバリではないか！二十代のヘミンクウエーが「青春をバリで生きたものにとつてそれからの毎日はバリ祭の連続である」と讚美したバリ！。若き日の薩摩氏が満喫されたベル・エポックのバリ！そんなバリはどこへいつてしまったか…世代の交代とはなんと過酷なのだろう！。

ラムールの都であるはずのバリに大恋愛などころがっていないかつた。到着後間もない私を出発前に東京で知りあつた国立図書館東洋部門に勤務のギニヤール夫人がある晩連れていって下さつたのはサン・ジェルマン街の地理学会講堂でのジャック・コポー(現代フランス演劇の功勞者)の朗読会！満員の聴衆は目を閉じてシャルル・ペギーの「ジャンヌ・ダルク」に耳を傾ける。コポーは暫くしてコメディー・フランセーズの支配人に推されたので、この劇場で私はもう一度獨軍襲來直前の土曜のマチネ朗読会で幹部級の俳優たちによる「ジャンヌ・ダルク」を聴く。静寂のうちに

終る。と、ラ・マルセイエーズが聞こえてくる。パリ市民の疎開が始まっていて数は少ないが観客一同起立し、悲痛な思いをこめて国歌をうたう。深く感動した私は祖国愛に身を捧げて志願・出征・戦死したベギーの存在はジャンヌ・ダルクというシンボルと重なってフランス国民には特別な意味をもつのだと納得させられた。こうしたベギーの存在の意義を思う時、どうしても対照的な存在として「戦いを越えて」と叫んだロマン・ロランの名が浮かび上がってくる。二人は十九世紀末に起ったドレフェス事件で互いにドレフェス派であるところから知り合い、やがてベギーが出版する半月手帖に「ジャン・クリストフ」が連載されることになった。

この二人とは反対に国民の統一とカトリック擁護の立場から反ドレフェス派にまわった二人の作家が私のスタンダール研究にとって特別の重要性をもつ。ポール・ブルジュエとモーリス・バレスー私が一時期愛読した小説「弟子」の作者でブルジュエが「現代心理論集」(二八八三―五)で扱った作家の中にスタンダールという名が見えたのが発端となつてスタンダール自身は苦しまぎれに予言した五十年後より十年早く没後四十年で初めて広く知られるようになる。すると忽ちスタンダールに心酔したバレスーが特にエゴチスムに関心を抱き始める。正にこのエゴチスムこそ私自身のスタンダール論の核心をなすものである。

一九四〇年六月十四日独軍がパリに入城！凱旋門にドイツ国旗がかかげられる。こうした客観的情勢には関わりなく、私は(論文はそれとして)「いかに学ぶべきか」という切実な問題と必死で取り組まねばならなくなる。失った自信を取り戻すにはこのパリで仏語を初歩から学び直すこと、と決意して音声学専門校、海外仏語教員養成校に通う一方ソルボンヌの仏語学の単位取得を目指す。二年目に目的達成！この喜びを伝えながらご無沙汰のお詫びにと国立図書館へかけつけた私を一目見るなり、ギニヤール夫人は「まあ、ミチ、すっかりやつれてしまつて……」と心を痛め、直ぐに夏休みをロアール河畔で催される女子学生修養会でのんびり過ごせるよう取り計らつて下さる。これが私の人生の新たなへ方向転換の奇縁となる。この修養会はマドレーヌ・ダヴィー女史の創立した女性知識人の共同体(修道

派としてはドミニコ会が独軍占領下の女子学生に快適な夏休みをと企画したもので、ここでの二ヶ月が私を心身の疲労のどん底から救い上げ魂の世界へと導いてゆく。かつて心を打たれて手帖に書きとめたまま長い間忘れていた聖アウグスティヌスの言葉が天から聞こえてくるような思いにかられる、「人びとはなぜ体の美がたの美のことがかり気にかけるのだろう、魂の美というものもあるのに。」これはパスカルの言葉ともたれよう。こうして私は留学生としての義務である論文作成は継続する許可を得て、ドミニコ会のシスターの修養に精進する身となった。こうした心境を私はパリを離れる前に（かつて母たちが懇意だったので、兄にでも打ち明けるようにロダンとロランを師と仰いでおられる彫刻家高田博厚氏に語った。高田氏は暫く沈黙のあとポツンと言われた、「ジャン・パロワ」を読んでごらん。」マルタン・デュ・ガールのこの小説の主人公はドレフェウス派の闘士で科学万能の信奉者だが晩年になって娘が教会に行っていることに気づいた瞬間、それまでの信条に疑惑が生じ、合理主義に立つ社会活動対魂の救済の板ばさみになる。〈科学対宗教〉これは時代を越えた永遠の課題と言えよう。その一方で私を根底から揺るがしたあの聖アウグスティヌスの言葉はへ人間という存在は何か〜に関わる定義ではないだろうか。今私は次のことをハッキリ思い出す。

——戦後に台頭した実存主義がキエルケゴールに始まるとの一般論に対して中世哲学の權威エチエンヌ・ジルソンはその発芽を聖アウグスティヌスに見出し、パスカルを経てキエルケゴールへという説をとなえてその年のコレージュ・ド・フランスでの彼の講義内容とした。この公開講義に私は熱心に出席したのだった。丁度この頃にここに就任したメルロ・ポンチ（現象学と実存哲学を奉じる）の「児童の心理」を聴講したことも思い出す。そもそもこのフランソワ一世以来の仏国最高学府に私が大胆にもバリ着早々（一九四〇年一月末 駆けこんだのはヴァレリ（一九四五年没）を聴講するためだった、私は彼の「スタンダール論」の結語を私への大切な激励の言葉と感じとっていたので。「スタンダールについては言い尽くされることは決してあるまい。」このヴァレリとの私の出合いはアテネ・フランセでのイズレール教授のテキストであった。仏文学に関するフランス人の先生でもう一人忘れ難いのは後に関西日仏学館館長

とられたロベール氏。先生を囲んでの私たちが有志数名のグループにお茶の水の日仏会館の一室で読ませて下さったポール・モーランの「国際的ヴィーナス」！その怪奇な場面を今だに私は夢に見ることがある。

ダヴィー女史の共同体が独軍占領下のパリを避けて運営されることになったロアール河畔の小村ブルーの丘上に建つ白亜のシャトーは庭園と果樹園にかこまれ周辺は平穏な農家なので解放と同時にパリへ戻るまでの日々は私の長い生涯でただ一度の地上のパラダイスであった。水源に乏しいとかでドイツ兵もアメリカ兵も現われず私の身柄は安全であった。こうして私がパラダイスで過ごした歳月の間地上の独仏協調に対抗して地下では抵抗運動が激烈になっていったばかりでなく一九四四年八月二十五日の「パリ解放」がパリ住民の市街戦で流された貴い血の賜であることも忘れてはならない。

パリに戻って間もなく私たちの共同体が突如ある事情で解散させられる。で、またもや私は「方向転換」！こんどは現実の世界へかえされてしまった。以後私は第十三区ラ・サンテ街の一軒家の一室に落ちつく。(この家は元の共同体に所属していた数人が女子寮を営むようになったので、日本人の私はここで保護してもらえた。)

解放後の数年間、それはフランス文化の新たなスタート！新聞・雑誌の創刊につづく創刊！講演会のあとの討論会！演劇界では初演！また初演！私は寝る暇も惜しかった。ある朝学生街で私は足もとの一枚のピラに気づき、拾う。その晩サル・ブレイエルでのマルローの公開講演「知識人に訴える」の予告なのだ！壇上につつま立ったままのマルローの口調が次第に熱気をおび、最後に右腕を高だかとかかかかって叫んだ、「われわれが、知性のたいまつをかかげなくてはならない、たとえこの手が焼けおちようとも！」

「実存主義」という言葉が大流行となり、片やマルセルの「カトリック実存主義」、片やサルトルの「無神実存主義」！ある晩私はクラブ・マントナンへサルトルの「実存主義は一個のヒューマニズムであるか」を聴きに出かけて

驚いた。アツという間に超満員！講壇の上まで顔！顔！私などは廊下へ押し出されてしまった。これら二つの講演会とは対照的なジャコブ街の小さな教室でカミユを囲んでの（不条理）に関する真剣な討論会！終了後私は大胆にもカミユに私の試みた日本人の特質についての小論を読んで頂きたいとお願ひしたのがきっかけで、カミユの得難い自筆の手紙四通を恵まれる。

演劇界ではコメディー・フランセーズのレパトリーに入っていて初演（二九四五）から満五十年の今年話題になつているカミユの「カリギュラ」の初演に成功したジェラル・フィリップが独特の印象を残している。一方、演出上の意外性がとても効果的なサルトルの「出口なし」も今だに上演されているのは、「なるほど！」とうなづける。

小説では私はカミユから「ベスト」の邦訳の委任状を頂いたが出版の手続き上フランスにいる私の立場は不利で実現せず、残念！サルトルの「嘔吐」の方は帰国後の私に中・上級テキストとして編注の仕事が一任され、現在も出版されていて嬉しい。

翻訳の分野ではジードの作品中私にとって最も興味深い「背徳者」が「ノーベル賞文学全集（一九七二）に採用され、喜んで引き受けた。思えばそれより二十年前、ジードの満八十歳（二九四九）を祝つたラジオが「ジードとの対談」三十四回連続放送を行った際私が聴取、邦訳して日本へ送つた関係で私はジードと親しいド・レトランジュ夫人の紹介でジードの自宅（ヴァノー街一番地）へ二度お邪魔したのだった。応接間の隣室の入口の壁にかけてある版画を私に見せて「これ、オ（ホ）クサイね」とニコリされた顔が目の前に浮かんでくる。永眠されたのはそれから間もなくのことで、その模様は中央公論へ書き送つたと記憶している。

この頃サン・テクジュベリの「星の王子さま」が人形芝居でも演じられたりして、たいへんな評判だったからだろう、リュクサンブル公園の南口近くにプチ・フランスという本屋が開店した。「オヤ！」と入ってみる。若い女主人から「シモーヌ・ヴェイユに興味がおありでしたら、すぐそこに両親が住んでおられますよ」と教えられる。当時

ガリマール社で顧問のカミュが（希望叢書）と名づけて未知の思想家、文学者を紹介し始め、ヴェイユの「根をもつこと」が刊行されたばかりなのである。直ぐにオーギュスト・コント街へ走った私はヴェイユの小柄で温和な人柄のご両親に迎えられ忘れ難い感慨の一時を味わった。シモーヌがいつも枕もとに置いていたギリシャ語の聖書、それに未発表の原稿の分厚い束も手にとらせて頂く。「同胞があればほど苦しんでいるのにベッドでなんか眠るわけにいい」とシモーヌは台所の床の上にぢかに寝ていた。「丈夫ではない娘の身が案じられてね……。その点では親不孝な娘でしたよ」と母上は顔をくもらせておられた。この時から二十年余り経って私は「シモーヌ・ヴェイユ——真理への献身」を書く機会を与えられたのだった。

翻訳という作業はあまり好まない私のみならず書房のロマン・ロラン全集「ゲエテとベートーヴェン」をひきうけた動機の一つは私の副論文が「ゲエテとスタンダール」であつたことかもしれない。（指導教授のカレ氏は比較文学者で著書に「ゲエテ」がある。）フランス人のゲエテとの関わり方を探究しているうちにロランの青年時代から晩年までのゲエテ観の変遷が非常に興味深く思えたのである。この時の私にとつてのロランとの出会いにスタンダールが一役買つてゐるのだから面白い！いや、この時だけではない。スタンダールは私をロラン夫人のもとへ連れていくことになるのだ。——今私の前にあるテープル（それはバンテオン脇のサント・ジュスヴィエール図書館なのかソルボンヌの図書館なのか現在の私にははっきりしないのだが）の上に乗かかっているのはシャンピオン版スタンダール豪華版の「ハイドン、モーツァルトおよびメタスタジオ伝」の冒頭におかれたロランの序文。それを写している私が不意に左手の男の人から声をかけられる、「マドモアゼル、ロマン・ロランに関心をおもちならロラン夫人に会いにゆかれたらどうですか？」私のことだから「是非！」とロラン夫人の住所（モンバルナス街八九番地）を教えてもらう。この親切な男の人はカンの大学教授アンジェロース氏だったのである。それからの三年間、毎年春から秋の終りまで私はヴェズレーのロラン家でキュヴィリエ夫人（ロラン夫人の母上）に祖母のように親しみ仕えながら勉強させて頂くことになる。ここでロマン・ロランが長

逝されたのは僅か二年前（一九四四）なので愛用のピアノを初めテーブル、椅子、ベッドなどすべてがご生前のままであった。書棚に並ぶ蔵書のうちではゲーテの仏訳本は勿論のことシェークスピアの仏訳全集もスタンダールのこの大劇作家との関わり方を扱う私にとって欠くことのできない資料であった。

パリではロラン夫人が「日本へのメッセージを依頼してみたら」と私をクロードル、ヴィルドラック、デュアメルなど日本人にとって親しみのある文豪たちに紹介して下さり、私はそれぞれのお宅へ出かけてゆく。先ずご高齢のクロードルがわざわざ原稿の形で書いて下さった日本女性へのメッセージは私を驚かせると同時に当惑させた、日本女性の典型として江戸時代の「女大学」の美德がほめたたえられているではないか！敗戦（つまり帝国主義＝軍国主義の崩壊）によって「やっつと解放された」と言える今日の日本女性は開いた口がふさがらないだろう。このようなメッセージが人目にふれてはと私は無断でこれを没にしてしまったことを今初めて告白する。映画や芝居でお馴染みの「商船テナシティー」の作者ヴィルドラックの方はインタビューをまとめて朝日新聞へ送ったと思うが内容についての記憶は惜しいことに全く無い。ところがデュアメルとの対談は予想もしなかったような顛末！応接間へ通された私の前にこやかにゆつたりと腰をおろされたデュアメルに私はごく無邪気な口ぶりで尋ねてみる、「先生は日本がお好きですか？」すると一瞬間がサツと赤くなったデュアメルは身をのりだし、威圧的な激しい語調で「ええッ？ニッポンが好き？ニッポンという国はわれわれのインドシナであんなひどいことをやっているじゃありませんか。絶対に許せないッ！」震えあがった私はジーツとうつつむいたまま。しばらくして恐る恐る目を上げると、そこには元通りのにやかな顔！「たいへんお邪魔をいたしました」と立ち上がった時、デュアメルは「お役に立てることがあったらいつでもね」と私の肩にやさしく手をかけて玄関口までつきそい、私が一步外へ出る時にはサツと私の左腕を支えて言われた、「マドモアゼル、ここに一つ小さな石段がありますよ。足もとをよく見て！転ばないように！」

こんなふうには日本へのメッセージをお願ひして歩く当時の私自身はどうかといえ、四二年の夏以降日本人の

顔を見かけることさえないのでから日本語を聞かず話さず、日本を恋しいと思ったことなど一度もない。それは日本を発つ前の一つの出来事のせいでもあったろう。——九月三日英仏の対独宣戦で渡仏が延期され私は下宿を変わる。一人の中年女性とのつきあいが煩わしくなった私が引越し先を教えなかったことに腹を立てた彼女は麹町警察署に「あれはけしからん女だ」と私を訴えた。閉じこめられた一室で威だけだかにかまえた特高から私はどなりつけられる、「お前のような女は死んだ方が御国のためだぞッ！」無言で下を向いている私は心の中でこう叫んだのである、「こんな窮屈な日本へなんぞ、誰が帰ってくるもんかッ！」

一九五〇年には論文提出も一段落し、コレージュ・ド・フランスの哲学教授ラヴェル氏の推薦によつて国立科学研究所(C・N・R・S)研究員の資格を得、また豪華版予約刊行社(ビプリオフィル社)の依頼で「金色夜叉」の仏訳を手がけ始めており、終戦後花らしくスタートしたユネスコでの仕事も望めそうに思えた。そしてフランス人の間には信頼できる親しい友人知人もできていて、ド・ポーモン伯爵での新進作曲家オリヴィエ・メシアンの新著作発表の夜会に招かれたりしていた。その一方で私は一九四六年夏の金山政英氏ご夫妻のご厚意によるイタリア旅行を皮切りに、国際親善、学生交歓会を戦後いち早く主催したカトリック系の文化活動に参加して、西ドイツ、イギリス、オランダ、ベルギー、スイスへと出かけていった。仏国留学生という身分証明書が日本人の私に国外へ出入りすることを許可してくれた、言い換えればこれらの国々と関わりをもったスタンダールが私の研究対象であるお蔭であった。このような私のところに五一年の秋、パリへ来られた木村太郎氏(タローアルの戯曲「マリアへのお告げ」の翻訳者でカトリック信者からのお手紙が届く。お会いしてみると、木村氏は戦後に大学となつた名古屋の南山大学の仏文科科長であられ、学長バーへ神父のご希望で同大学へ私に来るようにとのこと。あまりにも意外な申し出に、とっさには私はお返事の仕様もない。暫くしてからようやくくうお答えした、「私にはとてもへ学生に教える」といった資格などはないと思います。それに…十二年前に日本を発つ時、もう絶対に帰つてはこないと自分に誓つた私です。…」こうして即座に

お断りしてしまつた私はお詫びのしるしにもと、先生のご帰国の前日バスカルがかつて過ごしたポール・ロワイヤルへご案内することにした。リュクサンブール公園脇から出ている郊外電車ソール行きを利用して散歩したポール・ロワイヤル（十七世紀のジャンセニストの修道院跡）は淡く紅葉した周囲の樹木がなんとも言えない雰囲気をかもしだしている。後髪をひかれながらも暗くならないうちにと乗りこんだ帰りの車内で、「どうです、もう一度考え直してみては？」と誘いかけられる度に私は「折角ですけれど、どうしても日本へは帰りません」を繰り返すばかり。間もなく終点！という一瞬のことである、私の口がパツと開いて、「先生、行きます！」この一言はバスカルの口から発したものとしか考えられないのである。これが私の長い生涯を通して度々起つた（へ方向転換）の最終回なのかもしれない。

スタンダールとの私の関係の方は、へ人間としての自己の存在を絶えず念頭におきながら今日を生きていくという意味で、私は彼の自伝の表題「エゴチスムの回想」として後世に伝えられたこの「エゴチスム」という言葉の忠実な信奉者であると自認している。

自分という個人と取りまく環境との関わり、この観点に立つならば、俄然シャルル・ベギーとロマン・ロランの間像が私の前に現われてくる。一方でジャンヌ・ダルクを忘れられないフランス人！他方で大革命の時モットーとして自由、平等と並べて友愛を掲げたフランス人！この両方の必然性を私は四年前の秋と今年の春訪れたパリで再確認したように思う。地下鉄の通路に、キリストの肖像が紙面一ぱいのポスター！ロベール・オッセンの劇「イエス、それが彼の名だった」がスポーツ・センターで超満員の観客に向かつて、「互いに愛しましょう！」の大合唱で幕！私は感動し、改めて考えさせられた。——ベギーの巡礼の地シャルトル！そこには今日も見渡すかぎり彼が「大海のうねり」と歌つた豊かな麦畑の真只中に天へ向けて細い直線を鐘楼が描きだしているゴチック様式のノートル・ダム大聖堂！これより少し早く十二世紀前半にヴェズレーの丘上に建てられたサント・マドレーヌ寺院の方は堂々た

るロマネスク様式で、パイプ・オルガンの荘嚴な音色が今も響きわたっている。パリでは、通りすがりに見かける大小それぞれの教会の扉を押して中をのぞくと、時刻には関係なく、祭壇の前の信者の集まりが目に入る。このような光景は戦中戦後の十二年間私は見なかつたと思う。一九四〇年の初めにパリに着いた私が二年目にすっかり自信を失つてしまい、心身ともに憔悴しきつて、ときどきフト見つけた教会の中へこっそり入ってゆき、片角の椅子に腰かけて、ジーツと祭壇の方を視つめている間、会堂内に誰一人姿を見せないのがあの頃の実状であつた。

これらのことは、世紀末の今日、私たちに向かつて一体どんなことを暗示しているのだろうか……
ペギーとロランの考えを聞きたいものである。

(京都外国語大学名誉教授)



アレクサンドル三世橋のたもとを飾る
名声の女神像と、黄金のペガサスです

ロマン・ロランとシュトラウスの周辺

岡田 暁生

（サロメ）や（バラの騎士）の作曲家リヒャルト・シュトラウスとロマン・ロランが親友だったという事実は、案外と一般に知られていない。しかしシュトラウスとの交流は、小説家としてのロランの創作活動に多大の影響を与えただけでなく、シュトラウス研究家にとつてもまた、ロランの描いたシュトラウスの人物像は貴重かつ雄弁な同時代のドキュメントの一つである。ここではロランとシュトラウスを、互いに互いを映し合う鏡の様に用いつつ、彼らの生きた時代相を描き出してみよう。

1. 「バリのバイエルン人」——ロランの描いた人間シュトラウス

最初にシュトラウスとロランの交流の歴史を簡単に描写しておこう。二人が知り合ったのは一八九九、まだ音楽評論家として活動していた頃のロランが、インタビュをとるためにシュトラウスをベルリンに訪れた時であり（ジャン・クリストフがハスラーを訪問する場面は、初めてロランがシュトラウスを訪れた時を参考にして書いたと言われている）、その後、第一次大戦勃発までの約十年間、二人はとりわけバリで頻繁に交友を重ねることになった。シュトラウスはこの頃、毎年一度は必ずバリを訪れて自分の新作を指揮していた（要するにバリに自作を売り込みに来ていた）のだが、その時はいつもロランと会って、ドビュッシーやラヴェルといったフランスの新進作曲家と引き合わ

せてもらつたり、パリで評判の新作芝居やオペラを見に連れていつてもらつたりしていたわけである。また一九〇七年のシュトラウスの「サロメ」のフランス初演の際には、ロランが歌詞のフランス語訳をおこなつたりしている。しかしどういふわけか、シュトラウスとロランの間には、ホフマンスタールやツヴァイクとのような合作を作ろうとする計画は持ち上がらなかつた。シュトラウスはそもそも、人と突つ込んだつき合ひをするタイプの人ではなかつたし、ひよつとするとロランのことを単なる音楽評論家というか、パリでの自分の作品のスポークスマン程度にしか見ていなかったのかも知れない。そして第一次大戦後に二人の関係は自然消滅してしまふことになる。

この様に、ロランとシュトラウスの関係は、生産的で刺激に富み、かつ円満なものではあつたが、ただしそれは決して真の友情に高められることはなかつた。これはロランというより、むしろシュトラウスの性格と関係していたと思われる。多くの同時代人の証言によるとシュトラウスは、大変に礼儀正しいけれども、そこには「何かが欠けている」、つまり本質的に他人に無関心で、どこことなく相手を見下しているような印象を与える人物だつたらしい。またシュトラウスはよく冗談を言う人だつたが、その冗談も少々尊大かつ無神経で相手を傷つけてしまふ、そういうタイプの人物だつたようである。

大のシュトラウス嫌いだつたアルマ・マラー（作曲家マラーの夫人）の証言を引用しよう。彼女によればシュトラウスは、ウィーンでマラーの第二交響曲が大成功をおさめた後で、マラーに向かって「やあ、ウィーンの売れっ子が来たな、どうだい気分は」と声をかけたという（一）——本人は悪気はなかつたのかもしれないが、あまり趣味のいい冗談とは言えない。もう一つアルマの伝えているシュトラウスのエピソード。「食事の間じゅう、彼の念頭にはお金のことしかなかつた。大当りをとればいくら、普通にいけばいくら、と正確に印税を計算すべく、いちいちマラーにからんでいた。そしてその間、鉛筆を握りづめで、時折耳のうしろにはさむ。それも、半ばは冗談としても、彼のそうした振舞いは、まるで行商人のようにみえた。指揮者のフランツ・シャルクが私に耳打ちした。——

「あれで悲しいことには、てれかくしの戯れではないんです。至ってまじめなんですよ。」(2) これらの逸話からも、シュトラウスがロランとはまるで水と油の性格だったことが分かるだろう。

実際ロランは実際の初期の段階で既に、シュトラウスのこうした尊大な性格を見抜いていた。一八九九年四月の彼の日記には次のように書かれている。「微笑の中に隠された子供っぽい内気さと身についていた丁重さ。しかしその下にこの世の大部分の事物や人間に対する無関心または侮蔑を含んだ決然たる冷たい傲慢さが感じられる。この傲慢は、またしても会話の中で社交辞令を言って自己主張しなかったことを、一人になったときに悔しがるに違いない(この私に少し似て)。(3) そしてロランもまた、多くの同時代人と同様、シュトラウスの無神経さは少々気に障っていたようである。ただし彼はそれを頭ごなしに拒絶するのではなく、むしろ一種の共感と微笑をもって眺めていたようだ。ロランの描いたシュトラウス像の最大の魅力は、辛辣で鋭い人間描写とユーモラスな寛容の精神との調和である。

上に引用した一八九九年の日記ではシュトラウスの「傲慢さ」を書き記したロランだが、翌年の三月一日の日記の記述を見よう。ここでは彼は既に、自分のシュトラウス像に対する見解に微妙な変更を加えている。「彼の中には新ドイツ帝国の典型的芸術家がある。つまり、力の崇拜、弱さの蔑視を基調とするあの錯乱に近い英雄的自尊心、あの利己的で実利的な理想主義の強い反映がある。それに、私が最初は気がつかなかった、より本質的、南ドイツ的な若干の性格——古くから伝わる、逆説的で風刺的な、駄々っ子的、ティル・オイレンシュピーゲル的な、道化た氣質——が加わる。これに留意すれば、彼の考え方のいくつかに腹を立てないで済む。」(4)——シュトラウス——彼は生粋のミュンヘンっ子だった。——の中の「南ドイツ的な性格」を知れば、「彼の考え方のいくつかに腹を立てないで済む」とは、実に鋭い指摘である。バイエルン人氣質には実際、一種独特の癖があつて、それは表面的には陽気だが、本質的によそ者に対して非常に閉鎖的な農民氣質であると言えば、およそのイメージを理解していただけるだろ

うか。彼らには「おらが村が一番」式の田舎者特有のある種の無神経さ、全然おかしくないことをおかしがる田舎者氣質が確かにある。シュトラウスの中にこうしたバイエルン氣質を指摘した同時代人は、ロラン以外にはいない。

少々誇張して言えば、ロランはシュトラウスの中に、年に一度花の都パリに自分の作品を宣伝しにやって来る田舎からのおのぼりさん——「パリのアメリカ人」ならぬ「パリのバイエルン人」——的なものを見ていたように思える。一九〇〇年のロランの日記からエピソードを紹介しよう。「彼（＝シュトラウス）は喜劇に強く惹かれていた。道化芝居でもいいのだ。パリにいる間は、彼は善良なドイツ人として軽い笑劇を楽しんでいる。昨夜は彼は「レオンチーヌと旦那たち」を見に行った。御満悦だ。彼はちっともおかしい言葉大喜びで口真似する、彼には滑稽極まる洒落だと思えるのだ。」（5）「（演奏会の後で）私たちは舞台の上のシュトラウスに挨拶に行く。彼は大喜びでわくわくしている、とてもよかつたと言ってもらいたいのだ。シャルパンチエがやって来て、声に敬意と感動をこめて言う、へあなたは巨人です。彼はそれに答えて、へところで、シャルパンチエさん、モンマルトルでは敵はこんなふうですか？」と言つて大笑いする。X（通訳）がつまらぬ冗談言うつと、取り巻き連中が腹を抱えて笑う。私はシュトラウスを芝居に誘つて、「フランス座」にするか、それともどこかの娯楽劇にするかと尋ねる。へ娯楽劇、娯楽劇！——「へ実は、今週は「エディプス王」をやっているのですが。——「エディプス王」、それは何ですか？——「ヘソフォクレスですよ。——ヘソフォクレスはいけません！ソフォクレスはもう結構！パレ・ロワイヤル座がいい。」（6）ここでロランが描いているパリでのシュトラウスの振舞いは、今でもパリでよく見かけるドイツ（アメリカや日本？）の田舎からの観光客の振舞いを連想させるものがある。

2. シュトラウスの「力への意志」とロランの危惧

しかし言うまでもなくシュトラウスは、ただのバイエルンの田舎作曲家ではなかつた。ロランの日記からの引用を

読もう。「(家庭交響曲)のリハーサルで) かれの投げやりな態度は年と共に強まるようだ。(中略) いつも退屈そうにふくれつ面をし、半分眠っている様子、——しかし何一つ見逃さない。——彼の音楽は私の腸(はらわた)にこたえる。フィナーレは私には力と歓喜の波濤のように思える。どうして「あれ」が「これ」から生まれたのかいつも不思議に思う、しかし、それは、誰よりもよく、この私がわかつているはずだ(ただ、いつものことだが、この音楽には(邪魔もの)が多すぎる。まるで藻か細糸が英雄の胴体にからみついているようだ。)(7)確かにシュトラウスに対してロランは、上の引用の最後のカッコにあるように、ついぞベートーヴェンに対するような、無条件の賛美を送ることは出来なかつた。彼はシュトラウスの音楽のある側面に対して、いつも或る種のひっかかりを覚えていた。そして、なぜ「あの」音楽が「この」男から生まれて来るのか、釈然としない思いを抱いていた。にも拘わらずシュトラウスは、抵抗し難い力でロランを魅了し続けた、同時代で唯一の作曲家だったのである。

恐らくロランをかくもひきつけたのは、シュトラウスの音楽が持つゲルマン的な「力」の魅力だったのである。この「力」と「意志」こそは、フォーレやドビュッシーやラヴェルといった同時代のフランス音楽に——それらがどれだけ洗練されたものであるにせよ——最も欠けていたものである。シュトラウスはロランに対して次のように言つたことがある。「シュトラウスは皮肉をこめて言う……あなた方フランス人は悪趣味な何かを言うことをいつも恐れている。(これは正しい)。そして彼はこの精神的拘束をドビュッシーの作品の中に見ている、または見たつもりである。彼は言う……へとても上品で、とても……(彼は指をあれこれ動かして考える)とても人工的(Sekundel)です、自然発生的なものが全くありません。飛躍(Schwung)というものが欠如しています。」(8)恐らくこれはロラン自身の見解でもあつたことだろう。

しかしながらロランは、決してシュトラウスの音楽のゲルマン的な力だけを讃えたのではない。「力」と言えば、例えばマーラーの音楽にもシュトラウスのそれに劣らぬ、或はそれを凌ぐ力があるはずだ。にも拘わらずロランは、

俗物シュトラウスよりも人間的にはるかにロランに近い氣質の持ち主だったマーラーの音楽に対して、極度の拒絶反応を示した。彼はマーラーの音楽のことを「力の、ゲルマン的凶暴のいまわしい催眠術」(9)と悪しざまに言っているのである。ではロランが惹かれたのは一体シュトラウスの何だったのかと言えば、興味深いことにそれは、まさにシュトラウスの音楽が持つ「バイエルン氣質」に他ならなかった。ロランはマーラーとシュトラウスを比較して言っている。「かれ(＝シュトラウス)はマアラに劣らず神経質である。かれがオオケストラを指揮している間じゅうかれは熱狂的なダンスにふける。(中略)しかしマアラに対して一大長所をもつ…かれは休むことを心得ている。興奮し易くそしてうとうととして、かれはその無為の力で神経質から救われる。かれのなかにはバヴァリアの柔らかさという本質がある。」(10)バイエルン地方の中心都市ミュンヘンは、ドイツ屈指の大都会であるにもかかわらず、そこにはどこか田舎街独特ののんびりしたところがある。またミュンヘンは、アルプスを越えて流れ込んでくる南国イタリアの息吹がそこはかとなく感じられる街でもある。そしてミュンヘン生まれのシュトラウスの作品には、南ドイツ特有の透明感とラテン的な軽快さがあるのである。ロランをかくも魅了したのは、シュトラウスの音楽における、力と軽快のこの均衡だったのである。

しかしながら既に述べた様にロランは、シュトラウスに対してついで、ベートーヴェンに対するような無条件の共感を示すことはなかった。即ち彼は、シュトラウスの音楽における「力」が、しばしば暴力的なものへと傾くことに強い危惧を抱いたのである。一八九八年にロランは、シュトラウスの指揮ぶりについて、次の様に書いている。「全体としては、靈感よりも力において優れた男。生命力、ヒステリー、病的興奮、——こうした不均衡は意志の力でやっとな維持されているが音楽と音楽家を揺るがせにする。ベートーヴェンの交響曲のフィナーレを指揮する彼の姿——同時に半身不随と舞蹈病に襲われたような斜めにねじまげた背の高い体、握りしめた握拳する両の拳、内股になつて指揮台を踏みならす両脚——を見れば、軍隊的な力と硬直の下に隠された病疾を感知するのに充分だった。

——そうだ！ドイツは全能の平衡を長くは保持できまい。眩暈の嵐が脳に吹きこんでいる。ニーチエ、R. シュトラウス、ツイルヘルム皇帝、——暴君ネロの雰囲気。」(11)

シュトラウスに対するロランの芸術的懸念はとりわけ、シュトラウスのオペラ(サロメ(1905年)) (オスカ・ワイルド原作のこの作品は、同時代の最も前衛的な、そして最もスキャンダラスなオペラだった)において頂点に達することになる。この作品を舞台で見たロランは、強い衝撃を受け、シュトラウスに宛てた手紙の中で次の様に書いた。「あなたはとりわけ力を愛しておられる。そして私もとりわけ力を愛しています。——しかしながら、もう一つの力、共感の力をあまり軽蔑してはいけません。すべてを焼きつくす力があります。しかし精神を豊かにする力、——愛を伝え、吹きこむ力もあります。『家庭交響曲』の中に、『死と変容』の中に、『英雄の生涯』の中にはこの恵みの力がありました。『サロメ』の中には、それはもうないように思います。」(12)

また日記の中でロランは、手紙よりもさらに激しい調子で「サロメ」を批判して、次の様に書いた。「このオペラは泥も漂流物も泡も一緒に押し流す激流だ。その狂乱だけが取り柄だ。(中略)それは私に嫌悪感を与えるが、私はそれを賞賛する。自己の芸術的能力をこんなふうにも悪用した男をいくらか軽蔑しながら、やむを得ず賞賛するのだ。」「私は彼にすすめる、何よりも力を愛する癖はやめなくてもよいが、せめて善をなす力、最も偉大な芸術家たちの、ベートーヴェンの力のように、愛を伝達し吹き込むような力を選ぶように。——要約すると、私は『サロメ』が今日の劇音楽作品の中で最も力強いものと思われることを白状する。しかし彼自身は『サロメ』よりも格段にすぐれた存在であることをつけ加える。そして彼に願う、彼の勝利と彼の党派を越えて、今日の退廃的ヨーロップ、狂おしい歓喜の中で自殺へと急いでいく。」(13)

このロランの発言の中でとりわけ印象深いのは、「今日の退廃的ヨーロップ、狂おしい歓喜の中で自殺へと急いで行くヨーロップ」というくだりである。この一文はほとんど、これが書かれた七年後に起こった破局の、一九一四年

の第一次大戦の勃発の予言のように響きはしないだろうか。芸術家にはしばしば、予言者のごとき一種の予知能力が備わっている。彼らは普通人が気づかないような時代の不吉な兆しを、いち早く、ほとんど無意識のうちに、地震計のような感度で察知する力を持っている、ロランがシュトラウスの「ヘサロメ」の中に見たのは、後に第一次大戦となつて爆発するところの悲劇的な「力の過剰」だったのである。

3. シュトラウスと「世界に冠たるドイツ音楽」

「ロランとシュトラウス」と言えば是非とも触れておかねばならないのは、「音楽におけるドイツ国粹主義」の問題である。考えてみれば十八世紀から二十世紀初頭までの西洋音楽史とは、要するにドイツ・オーストリア音楽の歴史に他ならなかった。この二百年の間、フランスやイタリアや東欧からはせいぜい数人の作曲家が歴史に名をとどめているだけであるのに対して、ドイツ・オーストリアはきら星のような大音楽家を次々に輩出した。バッハ、ヘンデル、グルック、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、シューマン、メンデルスゾーン、ブラームス、ワーグナー、ブルックナー、マーラー、そしてシュトラウス——近代西洋音楽とは、ドイツ音楽が全ヨーロッパを征服した時代だったわけである。

こんな音楽におけるドイツ中心主義に対してロランは、非常にアンビヴァレントな感情を抱いていた。つまり彼はベートーヴェンやシュトラウスをこの上なく崇拜する一方で、言うなれば音楽的被植民地意識を患っていたのである。「今日の音楽家たち」というエッセイから引用しよう。「われわれはゲルマン的形式でものを考えている。フレエズの区切り、その展開、その論理、その均衡、あらゆる音楽的修辭法、作曲の文法は、ドイツの巨匠連によつて徐々にきたえ上げられた外来思想に由来している。このような支配はウァグナーの勝利の後ほど完全に重苦しかったことはかつてなかった。そのとき世界の音楽の上で巨大なドイツ時代が支配した。それは千の腕をもち、相互に結合された千

の関節をもった怪物で、その腕は限りなく伸ばすことができ、幾頁でも、幾場でも、幾幕でも、劇全体でも、一かかえでできこむことができる。われわれのうちの誰がいったいフランス人でありながらシラアやゲエテの言いまわしに従つてものを書くかと努めるのを是認するものがある。ところがそれこそ音楽ではわれわれがやって来たし、また今でもやはりやっていることなのだ。」(14)

そしてシュトラウスに対するロランの振舞いは、この様に自国の文化に引け目を感じ、むしろ外国文化に強く惹かれる人間の典型的なそれであつたと言えよう。彼らは、実は自国より外国文化に魅了されているにもかかわらず、自分が崇拜する当の相手を目の前にすると、彼らに少しでも自分達の文化に関心を示してもらいたがるものである。「自分はこんなにあなた達の文化を崇拜しているのだから、あなた達も少しは私達の文化を知つて下さい」というわけだ。ロランも例外ではない。彼はシュトラウスと会うと決まつて、ドビュッシーらの同時代のフランス音楽に関心を惹こうとした。ロラン自身、普段はドビュッシー(ベレアスとメリザンド)は例外とする)やフォーレやラヴェルといった同時代のフランス音楽を、さして高く評価していなかつたにもかかわらず、である。しかし残念ながらドイツ国粹主義で凝り固まつていたシュトラウスは、それに興味を示すことはまづなかつた。「したしいソフィア」の中の一九〇三年の書簡を引用しよう。「今日のドイツはドイツでないものに対する傲慢な無知に陥つています。それは、おそかれ早かれ、ドイツのために何かわるいことになりましょう。(中略)私はリヒャルト・シュトラウス、ワインガルトナー、ジークフリート・ワーグナーのような人々と話しました。そして私は昔や近代のフランス音楽にたいする彼らの無知または度はずれた無理解に啞然となりました。もしも私たちフランス人が同様だったら、私たちが何をどういったでしょう？」(15)

とりわけ興味深いのは、ロランが日記に記しているところの、シュトラウスと二人でドビュッシーのベレアスとメリザンドを聴きに行った時のやり取りである。「へいつもこんなふうなのですか?」——「へそうです。へこ

れだけ？：何も無い：：音楽がない：：脈絡がない：：ばらばらだ：：楽句がない。展開がない。」〔ドビュッシーの曲には音楽が不十分だと私には思えるのです。ここにあるのはきわめて繊細な和音、とても上手で趣味のよい管弦楽の効果です。しかしそれは何ものでもない、全然問題じゃない。あれではメーテルランクの劇を単独で音楽ぬきでやったのと同じことだと思います。〕「それでも、髪の場合と地下室の場面の前奏曲とそのあとの場面は彼をある程度楽しませる。スコア全体の中で、明らかにこの部分が彼の一番好きなどころだ。しかし彼は相変わらず、へとても上品です」と少し侮蔑的な賛辞に帰る。」(16)

そしてシュトラウスが一番気に入っていた同時代のフランス・オペラは、何とシャルパンティエのヘルイーズンという、恐ろしく通俗的でケバケバしい作品であった。ロランの伝えるシュトラウスの言葉を引用しよう。「私は（ヘルイーズン）が気に入っている）シュトラウスに隠さずに言う。旋律はマスネーのそれとそれほど違っているとは思われないこと。喜怒哀楽の感情表現がほとんど常に誇張と嘘に思えること。へしかし君、と彼は私に言う。ヘモンマルトルではこんなふうですよ。フランス人はこういうものなんです。大きな身振り、大袈裟な言葉、誇張と美辞麗句。こんなふうにはドイツではあなたの方を見ている。それでいいしそれが本当なんです。どの国民もそれぞれ欠点を持つ、あなたの方の場合はこれがその欠点なんですよ。」(中略) フランスには、騒がしい美辞麗句の隣りに感動の叫びが、身振りたつぶりの修辭法の隣りに深い感情があることを、常にあったことを彼に言っても無駄だろう。彼は耳を傾けないか、何も信じないか。すべてのドイツ人と同じように、御意見無用なのだ。」(17) もちろん天下のシュトラウス、ヘサロメを作曲したシュトラウスが、こんなものを本気で評価していたわけではない。「所詮フランス人には通俗劇がお似合いだし、またそれしか書けるわけがない」と初めから見下した上でそれを楽しむという、いかにもシュトラウスらしい態度ではある。

4. わたしはこの世に忘れられ

これまで話してきたロランとシュトラウスの交流は、専ら第一次大戦前の、いわゆる「ベル・エポック」とか「世紀末」とか呼ばれる時代のことである。そして既に述べた様に、第一次大戦を境に二人の交流は自然消滅の道を辿ることになった。第一次大戦以降は彼らの文通は途絶え、ロランは日記やエッセイの中でもほとんどシュトラウスには触れなくなる。しかしロランは第一次大戦後、もう一度だけシュトラウスと接触をする機会を持った。それは一九二四年五月のロランのウィーン訪問である。ここで彼は、当時ウィーン国立オペラの音楽監督をしていたシュトラウスを再訪問し、本当に久しぶりに、彼の多くの作品をまとめて聴くことになるのだが、この一九二四年のウィーンでの二人の再会は、名状し難い幻滅に覆われたものであった。

ロランの日記を引用しよう。「彼は退屈な貴婦人や名士のサークルに囲まれている。シュトラウスは真面目で、不活発で、愛情のこもった態度。国家主義者たちの狂気、脅威にさらされているヨーロッパ文明を憂慮している。文明は、彼によれば、ヨーロッパに集積している。この小さなヨーロッパ、三つか四つの国に。そしてその国々が互いに破壊し合っている！彼には理解できないことだ。彼の表情は暗い。昔のように、陽気さ、激昂、無意識の腕白ぶりが飛び出すことはない。」(18) 当時シュトラウスは六十歳、すっかり老人になってしまっていた。

ロランと頻繁に交際していた一九〇〇年から一九一〇年にかけてのシュトラウスは、時代の最も過激な前衛作曲家だった。しかし一九一〇年迎りを境に、シェーンベルクやストラヴィンスキーといった、シュトラウスより若く、更に激越な作曲家達が頭角を表わしてきた。そして第一次大戦後の一九二〇年代になるとシュトラウスは、作曲家としてはもはや完全に時代から取り残された存在になっていたのである。ロランが再会した当時の彼は、作曲家としては完全に才能が涸渇しており、およそ浮世離れた甘ったるくノスタルジックな音楽ばかりしか書けなくなっていた。こうしたかつてのシュトラウスの抜け殻のような作品の一つが、ロランのウィーン訪問の直前に初演された「泡雪ク

リーム」というお菓子のクリームを主人公にした甘ったるいバレエ曲である。このバレエは当然のように大失敗に終わったのだが、ロラン（彼自身はこの作品をそこそこに評価していた）は、この失敗にショックを受けたシュトラウスの様子を次のように描写している。「シュトラウスはこの（泡雪クリーム）の不成功にひどく落胆した様子。人々はいつも私から思想とか深刻なものを期待するのです。私だって自分の好きな音楽を書く権利はあるはずですが、私は現代の悲劇に堪えられない。私は歓喜をつくりたい、それが私には必要なのです。」——彼は国家の問題と国家間の紛争については全く無関心の態度を示す。——シュトラウス夫人は、蝶のようにあちこち飛びまわり、彼にケキをたらふく食べさせて、彼の頭に接吻したりしているが、祖国ドイツに関しては同じような無関心の態度をとる。」（19）かつてシュトラウスはロランに対して、「自分の方が弱いときに、強者の非を鳴らす弱者は嫌いだ」と言ったことがある。（20）こんな昔の自信満々のシュトラウスを知るロランにとつて、彼のこの泣き言はさぞかし哀しく聞かされたに違いない。

しかしながら老いたのはシュトラウスだけではなかった。当時彼が暮らしていたウィーンという都市もまた、マラーが宮廷劇場の監督をし、シェーンベルクらが活動していた一九〇〇年代の活気をもはや失い、過ぎ去った過去の栄光をなつかしむだけの街となつてしまつていた。そして一九二〇年代のヨーロッパの音楽創作の中心はベルリン、そして何よりもパリに移つていたのである。パリの音楽——かつてのシュトラウスが鼻も引っかけなかつた、あの近代フランス音楽である。

実際、十九世紀の終わりから二十世紀の初頭は、フランス音楽のルネサンスの時代であつた。ドイツ音楽が自らの過去の偉大な伝統の上であぐらをかいている間にフランス音楽は、フォーレやドビュッシーやラヴェル、更にはフアリヤやストラヴィンスキーのようなきらめく才能を生み出し、一九二〇年代に入るともはやその輝きは誰の眼にも明らかなものとなつて、ドイツ音楽を圧倒し去つていた。しかしシュトラウスはそれに気付くこともなく、時代から取

り残された街ウィーンで、のうのうと暮らしていた。ロランは次のように書いている。「ウィーン、——古くて大きな地方都市。この都市は、加速のリズム、ストラヴィンスキーやオネゲルなどの貢献、もはや音楽、特に劇音楽にはなくてはならないものになったあの熱狂、そうした新しい流れに気づいていないのだ。私はここでは、習慣の上に眠っている老貴族の家にいるような気がする。」(21)

しかしウィーンでロランが味わった幻滅は、果たしてシュトラウスに対してだけのものだったろうか？ 一九二〇年代の音楽史の中心は確かに、ドイツからフランスに移っていた。しかしながら決してそれは、ロランが期待したような形でではなかった。確かにロランはストラヴィンスキーやオネゲルといった、フランスで活躍していた作曲家の名前に言及してはいる。しかし彼らは、まったくロランの好みの音楽ではなかった！ そもそも十九世紀末におけるフランス音楽の再興の祖とも言うべきドビュッシーからして、ロランは実は「嫌い」だったのだ(22)。近代フランス音楽に特有の官能性や極度の洗練といったものは、ロランの体質には合わなかった。ロランが夢みていた未来のフランス音楽は、恐らくもつと力強く重厚で精神的なものであったのであろう。しかるにフランスは、確かに一九二〇年代に入ってドイツに代わる音楽史の中心地とはなったが、それはまさにフランス音楽の「軽さ」によってだったのである。

ウィーンでロランはまた、自分がかつて熱狂したシュトラウスの青春時代の作品とも、久方ぶりの再会をすることになる。つまり彼は作曲家自身の指揮で「ツアラトウストラ」と「英雄の生涯」を、久しぶりに、恐らくは第一次大戦以来初めて演奏会で聴いたのだが、しかし注目すべきことにこれらの作品にロランは、もはやかつての様な我を忘れた賛美は送らなかつた。「フィルハーモニーの素晴らしいオーケストラは、シュトラウスの指揮で「ツアラトウストラ」と「英雄の生涯」を演奏する。「ツアラトウストラ」は力強さのない曲だと思ふ、——熱狂的でない笑ひ、ウィーンナワルツに縮小された天体の舞踏。しかし「英雄の生涯」は若いときケルンのギユルツェニヒ・コンサートで

初めてそれを聞いた頃の陶醉を今なおよみがえらせる。」(23) この一文の背後に感じられる苦いノスタルジーは、シユトラウスの音楽の中に未来のヨーロッパ音楽の希望を見ていた自分自身の青春時代への幻滅ではなかつたろうか。第一次大戦後、ロランは同時代の音楽について発言することを止めてしまった。そしてひたすら彼は過去の古典の研究に、即ちベートーヴェン研究に没頭することになる。ひよっとすると第一次大戦後、シユトラウスだけではなくロランもまた、音楽史の流れから取り残されてしまったのかも知れない。

注 釈

- (1) アルマ・マラー『グスタフ・マラー 愛と苦悩の回想』、石井宏訳、東京…中央公論社(中公文庫)、一九八七年、五八頁。
- (2) 同書、一七九頁。
- (3) 『ロマン・ロラン全集40 シユトラウスとロマン・ロラン他』、片山昇・片山寿昭訳、東京…みすず書房、一九八三年、一一二―一二三頁。
- (4) 同書、一二二頁。
- (5) 同書、一二四頁。
- (6) 同書、一二五―一二六頁。
- (7) 同書、一四〇―一四二頁。
- (8) 同書、一五五頁。
- (9) 同書、一三八頁。
- (10) 『ロマン・ロラン全集21 芸術研究11 ありし日の音楽家たち・今日の音楽家たち』、野田良之訳、東京…みす

- ず書房、一九八一年、四四二頁。
- (11) 『ロマン・ロラン全集40』、前掲訳書、一一〇～一一一頁。
- (12) 同書、八六～八七頁。
- (13) 同書、一四五～一四六頁。
- (14) 『ロマン・ロラン全集21』、前掲訳書、四二～四三頁。
- (15) 『ロマン・ロラン全集35 』、新しいソフィア』、宮本正清・山上千枝子訳、東京・みすず書房、一九八一年、一一五～一二六頁。
- (16) 『ロマン・ロラン全集40』、前掲訳書、一五二～一五三頁。
- (17) 同書、一二六頁。
- (18) 同書、一六八頁。
- (19) 同書、一六八頁。
- (20) 同書、一二五頁。
- (21) 同書、一六六頁。
- (22) 『ロマン・ロラン全集38 』、往復書簡・手紙』、山口三夫訳、東京・みすず書房、一九八三年、一〇三頁。
- (23) 『ロマン・ロラン全集40』、前掲訳書、一六四頁。

(神戸大学助教授)

ロマン・ロランと日本人たち（2）

——影響の一例として——

小尾 俊 人

（四）

いまから二十九年前の一九六六年（昭和四十一年）はロマン・ロランの生誕百年目にあたりまして、私共は講演や演劇、また音楽会などで、ささやかなお祝いを致しましたが、大仏次郎先生は、そのさい名誉委員として、また講演者として参加して下さいました。先生は大正の末期にロランの著作三冊を翻訳して、日本の読書界に提供されました。それは「先駆者」「クレランボー」「ビエールとリュース」の三冊です。訳者名は、大仏さんの戸籍上の名前である野尻清彦となっております。

日経新聞の「私の履歴書」でその頃を回顧されましたつぎのようにのべられております。

「大学に入ってから私は、ロマン・ロランの『先駆者』を翻訳して、その頃よく本を買いに行つて懇意になつていた神田の洛陽堂から出版して貰った。ロマン・ロランはその後学校を出てから、二冊、翻訳して出して、思想的に傾倒し、影響を受けた」以上です。

二十四歳から二十七歳にかけてのことであります。

大仏さんへのR・Rの影響とはどんなものだったか、を考えてみますと、第一に、主著の「鞍馬天狗」です。

これは大正十三年から昭和三十四年にわたる大シリーズで、匿名のスーパーマン鞍馬天狗は大人にも子供にも読まれる百万人の小説として、有名であります。鞍馬天狗の主人公は国民的なヒーローになりました。かれには本名はなく、つねに覆面の浪人で、住所不定、神出鬼没、徹底的な自由人で、年令は四十すこし前、幕末の時代に活躍し、討幕派であり、長州、薩摩藩の武士と親しい。しかし勤王一辺倒という訳ではありませんで、鞍馬天狗の真価は、いつも権力に敵対することにあるのだ」といわれます。この自由さ、またその騎士道精神、女性に対する清潔さなど、きわめて印象的であります。

「『ジャン・クリストフ』は君、あれは日本でいえばいわゆる大衆小説だよ」とかつて片山先生が仰言いました。こういう意味で、鞍馬天狗はR・Rの間接的な影響を持つている、と思っております。

「鞍馬天狗」の戦後版のあとがきに、大仏さんは書いておられますが、

「いつ時分のことだったか？ 多分、もう十数年前のことであろう。まだ元気だった長谷川時雨さんが

「鞍馬天狗は、大仏さんだと思っわ」といい出した。

不意だったし、こちらは間違ついで、答えた。

「あんなに強くありません。鞍馬天狗ほど、剣道ができますとね」……

私は、自分でも鞍馬天狗が好きである。だが、鏡に写してみる自分の影だとは、毛頭、考えたことはない。彼は強だけでなく快活で行動的である。私は……怠け者で、人を離れて、ひとりでいるのが好き。ただし、鞍馬天狗のような男がこの世にいたら友人に持ちたい。「宝島」のスチーヴンソンが「友に持つならタルタニヤン」とした。あれと同じことである。友人としてこれ以上たのもしい男は、よそに見つかるまい。敵に廻って斬りむすぶのはごめんだが、話をしている分には、ものわかりよく、明るかろう」

と自らしるしておられます。

第二に、大仏さんの時代批判です。

「ドレフュス事件」(昭和五年)「ブーランジェ將軍の悲劇」(昭和十年)「パナマ事件」(昭和三十四年)この三部作と大作「バリ燃ゆ」があります。初めの二冊はいずれも外国を素材にして、当時の日本軍国主義の抬頭への批判をしたものです。いずれもハイ・プロウ、いわゆる知識階級向けのものであり、アランや、マルヴィータ・フォン・マイゼンブークなどの言葉が引用され、名著であります。

この「ドレフュス事件」と「ブーランジェ將軍の悲劇」の著作の間の時期に、一九三三年三月の、ヒトラーのドイツ政府の成立があり、つづいて有名な焚書事件がおこります。そのさいの大仏さんの抗議文が、「読売新聞」昭和八年五月二十八日号にのっておりますが、これが実に立派な文章で、あまり知られていませんから、つぎに御紹介したいと存じます。

時代に光あれ——ナチスの焚書抗議 大仏次郎

「ナチスが行った焚書の暴挙は、独乙の純粹を守る口実の下に行われて、眞実は世界の敬意を集めていた眞に独乙的なものの自己破壊であつた。僕らは祖国と同じく独乙を敬愛した。フリードリッヒ大王やビスマークや、況んやカイザーのあつたためではない。これらの非凡な独乙人は××館の壁に残る肖像画と同じく、過去の彼方に褪色した亡霊ではない。僕らが驚異し敬愛している独乙人は、僕らの間に現にまざまざと生きて永遠に強い息吹を感じさせている存在、ゲエテ、ベートーヴェンで代表される眞実の独乙人である。ゲルマニアの土に根をおろしながら、世界の空に明るい枝を差しのべている永遠の樹木であつた。宇宙的な抱擁力、国境を越えて人を納得させる力(軍隊の進出ではない!)——独乙の民族は、歴史の上に、人類の成長にそれまでの地標を劃したのである。

ナチスはそれを、わが手で破壊する。中世紀のゲルマニアの原始林の闇へ再び潜りこもうとする。原始世界の向う見ずな暴力が、公然と現代の伯林の歩道の上に揮われる。文化の成長を否定し、理性を退却させ、棍棒と毛皮を二十世紀の世界へと持ち出そうとする。しかも独乙の純粹を守る名目の下にある。焚書の兇戯に類しているのも笑つてはいられない。これは石器時代の人類の、盲目な蠻力の發揮である。未来はおろか、次の一日も考慮に入れてない。たゞ見るのは、原始の野蠻な本能の横行である。それが現代の組織の力を借りて、政府の命令で執行されるとき、独乙の純粹はどこへ行くのであろうか？ 絶望の勇氣だけが、この暴挙をあえてせしめる！ 健全を誇っていた独乙精神が、このような病的な発作の症状を示すに至つたというのからして、僕らは現在の世界がどこまで来ているかを痛感せずにはいられない。

この耳を傾ける余裕もあろう筈のない相手に対して、僕らが何か云いたいと志したのは、ナチスの暴圧の嵐の下でも、なお明日のあかつきを待っている眞実の独乙人がすくなくないと信じるからである。声を塞がれているその人たちの苦悶に、僕らは手を伸ばそう。大陸の果に、独乙の明るい未来を確信している外国人のあることを明白に伝えよう。君たちの苦悶は君たちだけのものではない。深淺の相違はあれ、僕らもまた、僕ら自身の手傷を抱いている。ここでも空気は重苦しい。偽愛国者に対して「日本の眞実の純粹」を、原始的な暴力の発動に対して理性を防禦しなければならなくなっている。世界を通じて外国のことだと自由で自由に喋れる、国の内のことだと思つて話せないというのは、何とも奇怪な世の中になつた。たゞ明瞭なのは、この中世紀的な暗黒に、いつまで人が耐えていられるかということだ。人間がそこまで愚な筈がない。日蔭にある植物ほど熱心に光を求めて強靱な茎を伸ばして行くのぢやないか？ ナチスの発作が、どんなに強暴なものであつても、いつまで、これが永続しよう。次に来るものは光だ！ 嵐は過ぎる。そうだ、一刻も早く過ぎさせねばならぬ。」

さて、さききのべました「ブーランジェ將軍の悲劇」であります。これが、昭和十年から十一年にかけて雑誌「改造」に連載されましたとき、日本ではちょうど、いわゆる皇道派の巨頭、荒木貞夫が隠然たる勢力をもって、青年將校を動かしていたときであります。筆者の意図は、国家における軍の位置をはっきりさせたいという目的で、過去のフランスが経験して通ってきた苦しみを日本の読者に知らせたい、ということでありました。

当時、大森義太郎という左翼の論客でいわゆる論壇のリーダーであった人がございますが、彼が大仏さんに会ったとき、申しますには、大森が中野正剛にある座談会で会ったとき、中野が、あれは荒木貞夫のことを書いています。だと話しているのを聞いた。「こわいのは何も来ませんか」という質問です。もちろん憲兵隊のことです。これは二・二六事件前後の時代です。著者も「もう二、三年あとだったら、この原稿はおそらく公表できなかつただろう」と書いております。

もう一つ面白いのは当時の文壇のボス、自然主義作家またいわゆる破滅型私小説家の典型的人物ですが、近松秋江（明治九―昭和十九年）という人、これが、内務省警保局長で、文化政策に熱心だった松本学に対し、大仏次郎の名をあげて告発しているのであります。いわく

「松本学氏よ、ゆめゆめ油断なざるな……もちろん、大仏氏は自ら宣して左傾派であるとは云わない。だがもし、日本の社会的思想的情勢にして、昭和六年九月十八日以前の傾向を（というのには、満州事変のことです）、その作風がどうなっていたか分らない。氏はけだし節操の氏であろう。又、自ら表面にをどり出て、自分の立場を下手に洩露するようなことはしないであろうが、氏の思想の奥底には、前述のあるものが潜在しているものと見るはひが目か。（前述のあるものとは、プロレタリア作家、革命作家の転向を、面従腹非、婦女子の卑劣に倣うものと云っていることです。）氏はおなじ大衆作家に分類されていても、三上於菟吉、白井喬二、吉川英治氏等と異り、文芸懇話会に招かれても遂に出席せず、従つて、陸軍大演習の陪観もしない……松本学よ、ゆめゆめ油断なざるな」云々。

以上であります。当時の文壇というものがいかに国家とむすびついていたか、あるいは自由な言論に対し、文学者が、特高のスパイまがいのことを、自発的にやっていたか、ということに驚ろくのであります。いわゆる日本の「広場の市」の風景であります。渡辺一夫氏は、この二冊の本を書いた鞍馬天狗の精神を理解しなかつた日本のインテリ世界、あるいは日本政治の現実をインテリの自己批判として痛切に記述されておられます。

*

大仏さんが戦後になって書いた『掃郷』という小説がありますが、この中の主人公のことは、つぎのようなものがあります。

「軍の圧迫があつたから戦争に協力したといまになってから云うのはそういうえばそれに違いないが、人間として卑怯者だ。たゞ、動いたのだ。氣違い染みた強い風に吹かれて動いたのだ。悲しい哉、動くように出来ていたともっと自分で気がついたら。ところで相も変わらず群動だけとはね。いつまでも根が地面に降りない」(群動とは陶淵明の詩の一節「日入つて群動息む」というところから来たことですが、いつも横を見て、群衆として、動くことでしょう。つまり戦後の日本も群動で、同じことを歎いているのです)。

(五)

ロマン・ロランの著作の一番初めにあげられるのは、彼の二十六才のとき、一八九二年、ローマ留学時代の作品である「ルイ・ド・ベルカンの最終裁判」であります。このベルカンという人は、エラスムスの友人であり、そのフランス語への翻訳者でもあつたのですが、カトリック勢力のため火あぶりの刑を受けたのでした。もしか、る運命なかりせば、フランスのルターともなつただらうと、申す人もおります。

渡辺さんのフランス・ユマニスムの研究の一節をなすこのベルカン事件についてのエッセーは、著作集の第五巻に入っておりますが、実は、この本のテキストは仲々入手できませんで、戦後の六年目の頃、渡辺さんからこの本のことをたづねられました。当時片山文庫にもなく御要望にこたえることができませんでした。

私があるとき、とつぜんに古本屋の原書店というのですが、こんなのは？と行って示されたのが、このベルカン研究のロランの本と、「戦いを超えて」の二冊でありました。この本はいずれも成瀬正一氏の所蔵のものが、市場へ流れたもので、このベルカンのテキストによつて、全集の四十三巻に収録することができました。

成瀬氏所蔵の「戦いを超えて」は彼のアメリカ留学中、ニューヨークの本屋で求めたもので、彼はこれを読んで感激、（彼はすでに「トルストイ」の訳を出しています）、「私にとつては、ジャン・クリストフを書いたロラン氏より、この戦争物を書いたロラン氏の方が有難い気さえする」と云っております。

その本がここにあります。紐育で買った日付けと、サインが入っており、お返ししますので、ごらん下さい。

ロランの「戦時下の日記」一九一六年夏にも、成瀬のこのことについての記事が出ております。

*

さて渡辺さんは、日本ロマン・ロランの友の会創立のとき、それは一九四九年、東京神田の共立講堂で「師、（メートルです）はわれわれに語る……」というタイトルで講演して下さいました。

その頃の渡辺さんの文章に「ロマン・ロランを偲びて」というのがあります。

「……日本は満州事変上海事変を重ねて行い、とうとう国際連盟を脱退し、ヒトラーと同盟や密約を結びました。そして間もなく日本は台湾、朝鮮を失い、主要都市の大半を廢墟に帰せしめました。……これらの時期の間、とくに日支事変末期に（昭和十五、六年頃でしょう）、僕はロマン・ロランの「戦いを超えて」を再読し、深く打たれたのです。そして今でも、この感動は薄れてはいません。日本に渡来されたフランス人でも、もちろんロマン・ロランに対する

敬意を惜しまれないのですが、時々小声で「ロマン・ロランはフランス国民にはほんとうは人気がないようです。何しろ国家の利害を無視する遊離性があるのですから」という方々も居られます。僕はこの批判に反駁を加えるだけの力量のないことを残念に思いますけれど、こうした批判は、決して良いものを産まぬだろうということを予感するのです。……ロランは、もはや他界しました。しかし、その志は、世界中の僅かな人にも、とにかく、少数の人々によつて、保たれているはずで、そのような人々が、圧迫され迫害され、抹殺されるような世の中が将来の世の中ならば、地球は眞二つにさけて二つの冷たい流星に化し、宇宙の大空間を機械的に走るほうがよいかも知れません。しかし、このような自棄的な考えは、タゴールによつてもロマン・ロランによつても、否定され戒められましよう。だから、もう一度やってみるより外に仕方がありません。かつての弱さ、かつての愚かさを、ふたたび繰り返さぬために（一九四八・八・二二）

*

皆さまよく御存じのように、昨年のノーベル文学賞を受けられた大江健三郎氏は、スエーデンアカデミーでのレクチャーでの講演を「あいまいな日本と私」—Japan, the Ambiguous, and Myself—と、こうタイトルでなさいました。もちろん、これは前回受賞者である川端康成氏の「美しい日本と私」—Japan, the Beautiful, and Myself—を意識して、その対極として、そのコントラストとして云われたのであります。講演のなかで、彼は、彼の恩師である渡辺一夫の名をあげ、彼の意見がまた、大江の意見が川端とは完全に違うことを申しております。彼は日本の現実を、そのままに認識し、その出発点として「あいまいさ」をとり上げたのであります。最近でた「軍縮問題資料」という雑誌に面白い記事がありました。「ヒューマニズムを否定する反動と日本」という題ですが、匿名の方であります。つぎのようなレポートであります。

「十月十三日夜、中央公論社のパーティーが盛大に開かれた。恒例の行事である吉野作造賞、谷崎潤一郎賞、女流文

学賞、新人賞の表彰式のあと、宴に移って間もなく、早耳筋から会場に「大江健三郎さんがノーベル賞に」というニュースが伝わり、ちよつと空気がざわついた。わたくしは、そのときの出席者の中の著名な文芸評論家や作家たちの引きつった表情と、かれらの言った大江氏を賤しめるかのような言葉を終世忘れることはないだろう。人間に嫉妬はつきもので、いちばん厄介なものだが、その劫を書くべき日本有数の知識人たちが形成している「文壇」という閉鎖的世界のおぞましさといやしさに呆然とし、そこから遠い位置に、しつかりと足腰をおろして、あえて孤独の道を選んでゐる作家に、敬意を表さざるをえなかつたのである」と。(同・二月号)

あれこれの現象をまとめて考えてみますと、これはR・R・の『ジャン・クリストフ』『広場の市』のまさに日本版ではないでしょうか？

(六)

一つの社会、一つの国家の未来をきめるのは青年であります。その青年たちの主要な関心を辿ってみると、時代の、さまざまな姿が、世代ごとに断層のように観察することができます。たとえば、日本で申しますと、

明治期 政治青年(明治維新、「末は大臣か大将か」)

大正期 文学芸術青年(白樺時代)

大正から昭和へ 社会青年(マルクス主義)

昭和期 市民社会青年(教養、社会科学)

このさいこの「市民社会青年」というのは、第二次大戦下に青春を送った世代でありまして、具体的には、ロマ

ン・ロランに関心を持った方の名前で申しますと、武谷三男とか、野間宏、木下順二、丸山眞男などの名前をあげることが出来ます。この世代の意識は、また、戦争の経験を忘れることができないので「悔恨共同体」とか「痛恨共同体」とかいう表現もごさいます。

そのうちの一人、丸山さんの場合をとりあげてみたいと思います。

ありのままの人間の世界、人間社会を、一つの秩序として系統立てて考える。こういうことが学者、とくに社会科学の学者にとつての使命だと思つたのですが、そうした立場から人間の作り出す現象を冷静に考察することになりますと、つまり認識ということなのですが、この全面的認識は、人間のギリギリの在り方を軸にして考えざるを得ない。つまり戦後の一九四五年以後の二十世紀が、アウシュヴィツツやヒロシマまたは南京事件といったものが、座標軸にならざるを得ない。いわば「死の家の記録」です。しかし、事実、だけにとどまるならば、それはニヒリズムとデカダンスに導かれる。それから脱出する道はあるのか、この認識という死の世界から、生きる希望への解放の道はあるのか、ネガをポジにする道はあるのか。救済 *Erlösung* への道です。

丸山さんは云われております。

「私はじめてロランを読んだのは、高等学校の時だったと思いますが、やはり『ベートーヴェンの生涯』ですね。あれはただの伝記じゃない。絶望とニヒリズムをつきぬけた人間性への讃歌に、ひじょうに感動しました。」（一九六六年）

そして、大学三年の夏休みに起こった「ジャン・クリストフ」との運命的な会遇があります。丸山さんは、この本を夏の海岸の松林で読み耽り、「八冊目を終るとすぐまた最初に戻って、とうとう三回続けざまに読んでしまった」、そして、それから十数年たつても「ジャン・クリストフ」はどうも抵抗できない得体の知れぬ力で、不断に私の意識の上のしかかっている」（一九五三）といっておられます。

また、マックス・ウエーバーとロマン・ロランというヨーロッパの二つの知的な巨人との、かかわりについて、両者の共通点として、音楽をとりあげ、それとともに、学問と政治、芸術と政治という二律背反、アンチノミーに耐えながら、「マルグレ・モワ」——つまり自分の柄にもないことを承知で、政治活動に足をふみ入れたという点でも共通しています。また、

「ロランが戯曲『狼』で扱った正義か祖国かというディレンマ、これはウエーバーの場合の言葉では、心情の倫理と責任倫理といわれるものです。ウエーバーは、政治の倫理は、〈責任倫理〉つまり状況への責任として行動の効果を考える立場でなければならぬ、としています。しかしギリギリのところでは、「われここに立つ」というへ心情の倫理〉になるといっています。」(一九六六)

現在のわが国の持つ最もすぐれた学者の一人が、こうしたジャン・クリストフの読者であり、ロマン・ロランの友である、ということ、大きな喜びであります。

ホフマンスタールというドイツ語圏の作家がおります。彼が「国民の精神的空間として著作物」(一九二七)という講演のなかで申しておりますが、「精神と政治」また「心情と責任」——この二つの矛盾するものの解決法は何であるか、それは、すべてが、この二つのものにむかって集中し、その緊張に堪え、そこにつくられる循環、サイクルづくりしかない。それを、やっていけないのがドイツである(これは第一次大戦のあと、の反省です)、一番よく行われているのがフランスであって、そこに真の意味の一つの国民というものが生じるのである、云々と。

これは、ドイツ以上に行われていないのがわれわれの日本でありましょう。

この点での、丸山さんの分析と方向づけはまことにみごとであると思います。大体、ロランと日本人とのかかわりを、とくに影響ということにしばってお話し致しました。最後に、ロランの最後の著作「ベギー」について一言付け加えたいと思います。

この本は、書き上げた日が一九四三年十一月、発行が翌四四年十二月三十日、ロマン・ロランの亡くなった日であります。

この最後の本の、最後のセンテンス、——ここにロランはペギーの「愛徳の神秘」*Mystère de la Charité*の最終節にある歌のような、祈願のような六行をひいて、戦後世界の若い人々のための訴えをしております。

それは、この地上に住むすべての人びと、その、

「すべての人類が、おなじ心臓で脈うつように。」

すべての人類がただひとつの心臓で脈うつように」

Que toute humanité batte du même cœur……

Que toute humanité batte comme un seul cœur.

これはペギーの祈りであり、ロランの祈りでもあったのでした。私たちの道も、この線上において、意味あるものでありたいとねがうものであります。

(ロマン・ロラン研究所理事・一九九五・二・二七 関西日仏学館)

ロマン・ロランの面影

落 合 孝 幸

ロマン・ロランに親しくお目にかかれたあの忘れがたい日、私は持参した「Pierre et Lucie」に署名をいただきたいが、ロランはその一隅に 30 avril 1940 としるしておられる。

思えば、あの日からすでに半世紀以上の歳月が流れ去っているのである。しかし眼をとじると、ロランの秋空のように碧く澄み切ったまなざしがいまだにありありと眼に浮ぶ。

私は、あれほど大きく、英知の靈氣に輝く双眸を、それ以前にも、また以後にも見たことがない。七十四歳の老人の眼でありながら二十歳の若者の眼よりも敏活に動き、時としては、相手の心の奥底まで見ぬくようにまっすぐ見つめるのである。ロランは、インドの聖者ラマク

リシュナの「眼は魂の十字窓」(Les yeux sont les croisées de l'âme) ということは著書「ラマクリシュナの生涯」中に引用しておられるが、ロランの眼こそ正に魂の交叉する十字窓にほかならなかった。われわれはその窓の奥に彼の高貴な魂をうかがい見る一方、その窓から射出する彼の魂の光りに威奮させられるのであった。

この地上に、世にもまれな偉大な知性が存在している、その人の名はロマン・ロラン、——ということをも、私ははじめて知ったのは、それより先きの一九二二年、私がまだ七年制東京高等学校尋常科二年(一般中学の二年)に在学していたときであった。

その日私は、同窓生吉田順五(のちの北大教授)の家に遊びに行っていたが、書棚にあった「ジャン・クリストフ」(豊島与志雄訳)にふと眼をとめて取り出し、何心なく読み出すと、たちまち魅惑されてしまった。そこで友人たちの談笑からはなれて、部屋の一隅で読みふけた。それはたまたま第六章「アントワネット」であったが、銀行頭取の父親が失敗自殺したために、破産没落して夜

逃げ同様にバリに出たジャンナン一家のなかで、それまでいたずら好きの無邪気な少女であったアントワネットが、悲運に苦しむ母親をけなげに支え、幼い弟オリヴィエが成人するまで献身しつくした短い生涯は私を深く感動させた。あの日の熱い心情をいまふりかえってみると、モーツァルトの楽曲の光芒にも似た愛の切ないまでに美しい物語の魅力もさることながら、その行間からあふれる著者の人格的香気——人間への深い洞察とあたたかい情愛——が私を引きつけ、教えを乞うべき賢者がここにいると思ひこませたものとおもわれる。

帰宅後、私は、「ジャン・クリストフ」をはじめ当時刊行されていたロランの訳書を買集めた。そして、くりかえし読んでいるうちに、どうしてもそれらを原書で読まなければならないと決心するにいたった。そこで高等科一年（一般旧制高校の一年）に進級するとき、何のためらいもなく第一外国語にフランス語をえらんだ。

そのとき教授のひとりとして赴任されたのが、東大仏文科を出て間もない若々しい渡辺一夫先生であった。白哲の美青年で、一見恥ずかしがりやのテレ屋にみえたが、

その教育は猛烈をきわめた。文法についても、こういうものについてでもかかわらないで、さつさと上げてしまいましょうといって、一学期の間に動詞の変化などをしやにむに暗記させ、二学期からはフランス文学の名作講読に進んだ。

おかげで、私は、二年生になるとロランの作品を辞典片手に何とか読めるようになった。そこで、こんどはロランのような高邁な作家を生んだフランス文学を研究したいという希望が押えがなくなり、東大に入学するに当たっては、ふたたび何のためらいもなく仏文科をえらんだ。

当時の東大仏文科は独立してからまだ日が浅く、主任の辰野隆先生は助教授、鈴木信太郎先生もまだ講師で、東大図書館勤務の山田珠樹先生が助教授、「ジャン・クリストフ」の翻訳者で小説家の豊島与志雄氏が講師として、それぞれ補助的に出講しておられた。

さて開講の日には、辰野先生が明るくあたたかい歓迎のこぼをのべられたが、その最後に「君たちはフランス文学を勉強しても、それだけではメシは食えませんよ」とはつきり引導をわたされた。これは冷たいようにみえ

てまことに親切な忠告であった。

そのころ、国、公立や私立の諸大学のみならず専門学校でもフランス語の講座のあるところはきわめて少なく、高等学校でもフランス語を教えているところは屈指り数えるほどであった。しかもそれらの教職は、それぞれ数年前までに卒業した若い先輩たちに占められていたので、当分空席の出る見こみはなかった。それ故新人生は、早や日に卒業後の身のふりかたを考えておかないと、あとでとまどうおそれが多分にあつたのである。

ただ私は、将来の進路についてすでに大体の見当をつけていた。その指針となつたのは、ロマン・ロランが「ジャン・クリストフ」の執筆中に公刊した「ミケラン・ジュロの生涯」の序文中の次の一節であつた。

“Il n'y a qu'un héroïsme au monde : C'est de voir le monde tel qu'il est, et de l'aimer”

私は、このことばを、「この世をありのままにみて、そしてこの世を愛することが人間の最高の生きかたである」という意味に受けとっていた。そしてまず「この世をありのままに見る」のにもっとも適した職業は何かと

考えたあげく、それは新聞記者であろうと思ひいたつたのである。幸いに、三年生になったとき、東大に新聞研究室（のちの新聞研究所、現在の社会情報研究所）が開設されたので、早速その研究生を志望し、河合栄治郎、南原繁両教授や小野秀雄講師の面接試験に合格して、ジャーナリズムの基礎知識を学ぶことができた。

一方、仏文科の卒業論文としては、私はロマン・ロラン以外のテーマを取り上げる気は全くなかつた。そして当時はまだロランの回想記、自叙伝などが発表されていなかったもので、そういう一次資料の欠ける現存作家については、作品中の登場人物が人生の岐路に立つたとき、どのように決断し、どのような行動に出たかを分析することも、その作家自体の思想構造を察知し得る一つの方法であり得るであろうとの前提に立つて、試論“Petit Essai Analytique sur le Systeme de Romain Rolland”を提出して、無事卒業した。そして、新聞聯合社（のちの同盟通信社、現在の共同通信社の前身）に入社して、ジャーナリストとしての一步を踏み出すことができた。その後、同社若永裕吉社長の推薦で、国民新聞社の社長秘書とな

つたが、一九三六年には結核のため辞職して療養につとめる身となった。

病気はほどなく回復に向つたが、もはや社会での激務につくのは無理と思われたので、読書研究に専念すべく、翌年春東大大学院に入学した。

同じ年、渡辺一夫先生のおすすぬめによつて、ピエール・ロティの日記（「ロティの日記」白水社）を翻訳出版したが、それが機縁となつて、思想も文藻も全く対照的なピエール・ロティとロマン・ロランとを見くらべながら研究する立場をとることになった。

その結果まず行き当たつた疑問は、ロティもロランも、少年時代にキリスト教の信仰を見失つたことは全く同一なのに、ロティの方は、この世のすべてはたえず変化し、生滅し、結局は暗黒の深淵に沈むとの虚無感におちいつたのにたいし、ロランは、同じく鋭敏で傷つき易い感性の持主であつたにもかかわらず、そうした虚無感にとりつかれることなく、積極的に永遠の存在を肯定し、独自の信念を樹立したが、それはなぜかということであつた。そして、その謎を解明し得ないまま、私は、ロティ芸

術の獨創性の一つである憂愁の詩情に親しみを覚え、かつそれを生んだのがひたむきで真剣な彼の虚無感であつたことを認める一方、この世に生きる姿勢としては、ロランに学ぶほかはないという気持を強めて行つたのであつた。

私が東大大学院に随時通学していた間に、日中戦争は、北支から上海へ、そして中支へと飛火した。そして、しだいに高まる社会の熱気のなかで、私自身は亡父の遺産で徒食し、他人の生産物を消費しながら、社会に何のお返しもしない寄生虫、無用の人間だといふやましさになえずなやまされるようになった。そこへ、一九三八年四月、高校時代からの親友で外務省情報部の事務官をしてきた松井明（のちの駐仏大使、国連大使）が電話をかけてきて、「君の語学とジャーナリストとしての経験を生かして、情報部の仕事を手つだつてみないか」とすすめてくれた。幸いに健康もほぼ回復していたので、この親友の厚意にしたがつて外務省に顔を出してみると、すぐにも嘱託として働いてくれといわれた。

仕事は、海外からの資料を翻訳したり、各種情報を検討分析したりすることであったが、翌一九三九年の夏にはヨーロッパで第二次世界大戦が始まったので、急にいがしくなった。

そして、その秋に河相達夫情報部長が無任所公使として欧米各国を巡歴査察することになったとき、また松井明から同公使の秘書格として随行する気はないかとの話もちこまれた。

この地球を広く見てまわるといふことは私の宿願でもあったので喜んで応諾し、新婚早々であったが、同年十二月十四日、河相公使とともに横浜を出帆し、サン・フランシスコに上陸して北米大陸を横断、ニューヨークで用務をすませたのち、マイアミから航空機で中米、南米諸国をめぐる、ふたたびニューヨークにもどった。そして、ニューヨークからイタリア豪華船で大西洋をわたり、三月九日ナポリではじめてヨーロッパ大陸の土をふんだ。

そして、ローマで数日をすごしたのち、列車でフランスに入り、パリに到着、会議などを終えたのち、ドーヴ

アー海峡を連絡船で越えて、ロンドンに赴いた。

ここで私の任務は終り、河相公使の以後の旅程であるドイツ方面やソ連などの語学に堪能な人と交代することになった。そこで私はパリに引きかえし、帰国の船便を待つという名義で三月末から四月にかけて滞在した。

陽春のパリは、相変わらず世界からの観光客でにぎわっていた。それに入りまじって、私もまたフランス人のよきいう「*La joie de vivre*」(生きる喜び)を味わうことができた。

しかし、四月八日、それまで約半年間も独仏国境で英仏軍と睨み合ったまま、休戦状態をつづけてきたドイツ軍が、突如ノールウエイ、デンマークを攻撃占領した。

パリ市民は、高まる不安を胸に秘めつつ、マジノ要塞線の難攻不落を心頼みに、その日その日の平穩をせめても楽しもうとしていた。

都心では、名優ルイ・ジューヴェの演出・主演するジャン・ジロドウ作「オンディーヌ」が人気を集め、當時全盛のシャンソン歌手リュシエンヌ・ポアイエは彼女のキャバレ・シエ・ゼルで「パルレ・モア・ダムール」

を絶唱していた。そして、リドの舞台では、カンカン帽を小意気にかぶったモリス・シユヴァリエが、渦巻く美女の群のただなかを歩きまわりながら、「青春は五期あるが、私はいまでも第三期」と軽快にしゃべって、満場を沸かせ、フォリー・ベルジエールでは、ジョセフィヌ・ペーカーが、褐色の肉体をうねらせて、「ジェ・ドウ・ザムール・モン・ベイ・エ・バリ」と歌っていた。

そうした日々のなかのある夜、私は日本大使館のパーティーで、改造社の山本実彦社長とことばをかわす機会を得た。そのとき山本氏はふと近くヴェズレーにロマン・ロランを訪問するともらした。私はさっそく同行を希望し、山本氏は快く承諾してくれた。

数日後、私はマロニエの街路樹の下で、山本氏と案内役の彫刻家高田博厚氏とを運んできた自動車にのりこみ、パリを出発した。

夜来の雨でやや増水したセーヌ河やヨンヌ河のなごやかにうろおす新緑の沃野をわれわれはひたすら東南に二百キロほど走った。そして風景がようやくブルゴーニュ

の高原らしくなったころ、丘と丘との峽間はざまのかなたに、突然ひろびろとした見晴らしが開けた。

広大な空一面にひろがる雲には、いくつかの裂け目ができている、そこから光線の束が地上にふりそそぎ、その天と地を結ぶ光りの列柱を背景に、大寺院を頂上にいただく丘が孤島のように盛り上がっていた。それが聖王ルイや十字軍の歴史で名高いヴェズレーの古雅な姿であった。

ロラン家は、丘の頂上のサント・マドレーヌ大聖堂へのぼる道の右がわにあつた。灰色の石壁の真中にある門からはいると、石畳みのこじんまりとした前庭があり、その右手に質素な玄関がつき出していた。いなか娘らしく血色のゆたかな、いかにも気だてのよさそうな若い女中さんにみちびかれて、玄関を通りすぎたとき、私は、二階に通じる階段口に、灰色のマントを羽織って、階上を仰ぎみている長身の老人を見た。

ロマン・ロラン！ かねてから写真で見知っていた彫りの深い端嚴な横顔であつた。

その階段口につづく広間を通りぬけると、つき当りが

応接間になっていた。幅約六メートル、奥行き約四メートルの横に長い部屋で、左手には暖炉の前に椅子・テーブルがならべられ、右手にはりっぱなダラン・ピアノが置かれていた。光線は正面にたてつらなる硝子戸からきていたが、そのそばに立ちよると、いきなり眼の下に、なだらかな谷間や新緑の木立ちが広く遠く見わたせた。

やがて、当時四十歳代半ばのマリー夫人がにこやかに姿をあらわした。そして、われわれはさらに奥の別室で、夫人心づくしの茶菓でもてなされた。山本氏と高田氏とがテーブルをはさんでロランと向い合つたので、私はロランの隣に腰かけることになった。

話題は、ロラン夫妻のソ連訪問（一九三五年）に移り、マキシム・ゴリキーの款待を受けた想い出話に及んだ。そして、やや粗野で冗談好きなスターリンとその側近たち、ことにゴリキーを毒殺したと疑われているゲ・ペ・ウ長官やコダなどの噂も出た。私はもっぱら諸先輩の会話の聞き手になっていたが、ついにかねがね心にわだかまっていた疑問をおさえきれなくなり、思わず口をはさんだ。

「ソ連の指導者たちはほんとうに民衆の何を思うことで行動しているのでしょうか。どうも疑われてなりません。」

すると、ロランは、コーヒーカップを受け皿において、「なぜですか」と私に向き直つた。そして、今日出会つたばかりの異国の若者の云い分にもじつくり耳を傾けようとする誠意のこもつたまなざしで、私を見つめた。

「なぜなら同じ理想を実現するために、ともに命をかけてたたかってきたはずなのに、革命が成功するとすぐに疑い合つたり、憎み合つたり、はてはかつての同志を殺したりします。それではいわゆる政治屋が私利私欲のために互いに術策や陰謀をたくましくして争い合い、打倒し合うのと余り変りはないのではないでしようか。」

と、私はことばを選びながら、ほつりほつりと述べた。そうしているうちに、それまでに若さの余り、世の中には醜い争いが多すぎると思いつめていた気持が、胸一ぱいにこみ上げてくるのを覚えた。まじろぎもせず私の眼に見入っていたロランの顔が、そのとき不意に人なつこ

く、やさしくほはえんだ。

“C'est ce que c'est que la politique, monsieur.”

「それはね、政治はどういうものかということなんですよ、きみ。」

私の胸の奥底まで見とおしたこの的確簡潔な回答を耳にして、私はあたりがぱっと明るくなるのを感じた。日ごろロランの作品を読んでばらばらに得ていた知識が、その瞬間にさっとより集って生きものになったといおうか、不意に生き生きと動き出した思いであった。その上、私は、ロランの慈父のようなまなざしに、「しっかりとしまえ、負けるんじゃないよ」という無言の励ましも読みとっていた。

ロランは、周知のとおり、第一次世界大戦が勃発したとき、自己の信念に忠実であろうとするやむにやまれないまごころから、黙っていることはできなかった。そして、「誰も他の人のいわなかった」反戦平和の訴えを世界によびかけたが、同調する知識人はきわめて少なかった。のみならず、ドイツ憎悪と抗戦の熱情に燃えていた祖国の人々のなかから彼を非国民あるいは裏切者と嘲罵

する声さえ上がり、彼はスイスに引きこもって、国際赤十字の仕事を奉仕することで寂寞の想いを慰める日々を余儀なくされた。しかし、その後また好戦的なフアツシヨやナチズムの抬頭によって、第二次大戦の脅威が高まると、彼はふたたび反戦平和のために立ち上った。そして、とくにソ連共産党の抵抗に期待し、敢て声援もしたが、そのソ連自体が、あろうことか、宿敵ドイツと手を組んで、ポーランドを分割領有し、弱肉強食の同じ本性を暴露したのである。それ故、ロランはもはや人類の救い難さに絶望しておられるのではないかと私は半ば想像していた。が、まのあたりにみる彼の眼光は、この世の悪や不正を見きわめ知りつくしながら、なおも人類を愛して、その調和統一のためにたたかおうとする不屈の勇気を明かに示していた。

その日から十日ののち、ドイツ軍は、まずオランダ、ベルギーを奇襲したのち、五月十四日には、空陸協同の集中作戦でマジノ要塞線をたちまち突破し、フランス国内になだれこんだ。パリの新聞は第一面に地図をのせて、

ドイツ軍の占領地域が日ごとに拡大して行く状況を黒枠で図示した。そしてその黒枠はみるみる大きくなって行った。

パリ市内では、中小商店のみならず、デパートまでが投げ売りをはじめ、各街道には気の早い避難民がひしめき流れ出した。

私は混乱のバリに心を残しながら、マルセイユに南下し、燈火管制下のホテルの一室で、ロランにお礼とお暇乞いの手紙をしたためたのち、藤田嗣治画伯夫妻たちと同じ邦人引揚船で、地中海から印度洋を通って帰国し、世界一周の旅を終った。

帰国してから数ヶ月後に、外務省情報部は内閣情報局に統合されたので、私も内閣に移って「国際月報」などの編集を担当していたが、やがて内閣の情報官に任命された。そして、一九四五年八月十五日の敗戦の日を迎えた。

ついで、私は終戦連絡事務局連絡官として仙台に派遣され、アメリカ占領軍との交渉に当たったが、翌年春には健康を害して辞任し、家族の疎開していた盛岡に引きこ

もった。

一九四八年になると、健康の回復した私は、地方新聞の専務取締役を選任されたが、一九五一年、民放制度の開設により創立されたTBS東京放送（当時ラジオ東京）に入社し、いくつかの管理職を歴任したのち、最後は関連会社日音の役員となった。そして一九八一年すべての役職を離れたときには、すでに七十歳を越えていた。

その間、マスメディアに関与するサラリーマンとして、任務に公正であろうとする志は失わなかったつもりであるが、さきのロマン・ロランのことばの「この世を愛のままに見る」努力を先行させたために、「この世を愛する」努力はゆるがせになり、ひいてはロランの教えにもとつたのではないかとの悔いが残った。それはいまなお私の胸中にくすぶりつづけている。

性格の弱さや才能のとほしさから、私は運命に流されるままに、いろいろな職務を転々としたが、ことに戦後の混乱と窮乏のなかでは、家族の生活を守るのが精一ぱいであった。しかし、やがて経済的にも時間的にも多少の余裕を生じたので、ロラン晩年の諸著作、とりわけ没

後に公表された回想録や自叙伝、書簡集などを入手して、ロラン研究を進めることができた。そのさい私の関心は、おのずから彼が少年時代に既成の形式的な「教会の神」と訣別したあと、その精神的空白をどのようにして克服したのかということに集中した。

ロランは、十六歳からエコール・ノルマルに入学する二十歳までの数年間に、「三つの閃光」の直観的神秘体験によって、自己と宇宙の万物とは本質的に同一であり、またすべては永遠の實在のなかにあることを覚知している。そしてそれを哲学（ことにスピノザ）研究によって裏付けつつ、二十三歳のとき論文「真なるが故に信じる」を書き上げて、信条の基盤を定立し、さらにその後もたゆみない省察をつづけ、また晩年にはインド思想研究の成果も加えて、人間をふくむ宇宙のすべては永遠の實在に「神」に包摂統一されるという「ユニテ」の信念を成就した、——と、私なりに理解した。

他方、私は、ピエール・ロティの研究もつづけ、一九九二年「ピエール・ロティ——人と作品」（駿河台出版社）を刊行してそれを総括したが、はしなくもその過程

で私のロマン・ロランへの心服はゆるぎないものとなった。たとえば、ロティは肉体をもつ特定の人間すなわち個人をもつばらその愛の対象としたので、その対象が必ず死ぬことに絶望して虚無感に圧倒されたが、ロランは、人間存在そのものを広く愛し、その人間のなかにも「神」すなわち永遠の實在の厳存することを確認して、不拔の信念を達成している。そのことだけでも、ロランが求道の精神においてロティより徹底していたこと、そしてそのため、宏大無二の信念を悟得したことが明らかであり、その点彼は賢哲としてロティより優位に立っているのである。

しかも、その信念確立にいたるロランの真理探求は、人間はなんであるか、そしていかに生きるべきかの問題意識から出発している。

それ故、人間すなわち自己のうちにも他人のうちにも「神」を見た彼は、利他奉仕の人類愛の良心的実践に踏み入り、たとえば、第一次大戦勃発時のような受難の重荷をも進んでになったのである。かくして彼は、あの偉大な文筆活動によってその信念を発揚する一方、人類協

和を追求する實際行動をも貫き通し、信念と実践との、そして知と愛との、誠実無比な言行一致の範を示したのであった。



左よりロラン、高田博厚、山本実彦、筆者

いま混乱する人類は、ロランの信念に背反する方向に

走りつづけているようにみえる。せっかく冷戦が終つたのに、こんどは宗教の相異や民族の対立に基づく血まみれの抗争やテロが世界各地で続発し、止まるところを知らない。が、そのことで失望し、無力感におちいつてはならないであらう。

ロランは、生涯の大部分にわたり、フランス革命劇を構想連作したが、そのさい彼は、世界をゆるがせたあの大事件も、宇宙を支配する諸原則により過渡的に生起した「社会の嵐」(Tempête sociale)とみている。このことは、歴史家としてのロランが、動乱流血の大革命も相対的な現象界に起伏する風波(仮象)にすぎず、その本源には永遠不滅の「神」すなわち真理の諸法則とその秩序が実在し、すべてを進歩統一の方向にみちびくとの透徹した認識を保持していたことを思い知らせる。そしてこの認識(歴史観)は、彼の信念の必然的所産であるが故に、終始変らなかつた。現にロランは、フランス敗戦の暗い最晩年の日々に、ヴェズレーの家のテラスから、ドイツ侵入軍のまき上げる砂塵を眺めたときにも、

「国と国との衝突、虐殺、狂暴な精神錯乱を超えて上

方にある「運命」の最高の手とその大きな諸法則とが、人類を、その諸目的にみちびいていく。なんたる多くの混乱を通じて！　なんたる多くの障害を通じて！……」〔内面の旅路〕（片山敏彦訳）

と達観し、さらに

「だが車軸は無事である。そして雲々のあいだを、太陽の車がその道を進みつづけている。——もろもろの宇宙を支配している秩序にしたがつて」（同上）

と銘記して、「太陽の車」を駆る「神」が、人類最悪の敵すらも「人間進歩の道具」（同上）に使って、最後には勝つと不敗の信念を確保し、「神」とともに前進すべきこのたたかいいにおいて、「おちついて、しつかりして、しんぼう強くあるがいい！」（同上）とわれわれを励ましていく。

このロランの雄々しいことばを信じないで、いま誰のいうことが信じられよう。

（日本仏学史学会名誉会員）

上田秋夫 追悼

——詩人 上田秋夫の青春

永田和子

昨年、一九九五年三月二十二日、詩人上田秋夫先生は九十六歳の天寿を全うされた。「自分が『春』であることを知らない、親しい『愛すべき秋』よ」とロマン・ロランから告げられた詩人は

こころのはるは
いつでも
いつでも
かえつて来る

このよろこび
の短詩を白鳥の歌として、春彼岸の候、静かに旅立たれた。

一八九九年明治三十二年、県会議員で土佐電気鉄道の創立者でもあった上田保の長男として生まれた上田（以

下敬称略)の長い人生は、雑誌「白樺」を愛読した中学
生時代、上京して上野美校木彫科への入学、大正十四年
の卒業、翌年結婚して東京杉並天沼ではじめる新生活、
同人誌「大街道」「東方」「新しき村」「生長する星の群」
「生活者」への寄稿時代、ロマン・ロランやマルセル・
マルチネらとの文通により、かきたてられるようになら
けて行つた昭和三年から四年にかけての一年三ヶ月のフ
ランス生活の青春時代と恵まれた環境の中でその個性を
確立していった。しかし一九二五年治安維持法が議會を
通過し、二八年緊急勅令による死刑法に改定されるとい
う激動の時代に、反戦の文学者・詩人たちとの交友を持
つことは上田の生き方に強い覚悟があつたはずである。
寡黙であり自己を語らない、静かな人柄であつた上
田は貴重なものを残された。疎開してあつて高知空襲を
免れたサイン入りのフランスの友たちからの寄贈本と彼
等からの手紙である。これらの整理を、ご遺族からおまか
せただいて、私は感動の日々を送ることとなつた。手
紙は茨城県竜ヶ崎市在住の山口三夫氏が読み取りをお引
き受けくださったので、私が封筒と本文の日付を合わせ、

年代順に並べてコピーをお送りした。手紙の送付先、発
信元、日付、印刷はがき郵便はがき便箋書きの区別、本
文中の人名、書名、地名、その他の固有名詞等々、明確
に、整然とワープロ打ちされた一部が、すでに高知へ送
られているが、長い間、ロマン・ロランやその周辺のご
研鑽を積まれた方ならではのお仕事として、敬服の念に
打たれる。特にマルセル・マルチネの字体は読み辛く、
「二週間ながめて、やっとわかりましたよ。」と薄いコピ
ーの手紙など、ご苦勞をおかけしている。

上田に宛てたフランスからの手紙の内容は次の通りで
ある。

・ロマン・ロラン (Roman Rolland)

手紙十七通、電報三通

・マドレーヌ・ロラン (Madeleine Rolland)

ロラン令妹 十通

・マリー・ロラン (Marie Rolland)

ロラン夫人 六通

・マルセル・マルチネ (Marcel Martine)

四十八通

・ルネ・マルチネ (René Marcel Mariné)

マルチネ夫人 五通

・ダニエル・マルチネ (Jean-Daniel Mariné)

マルチネ長男 二通

・マリイ・ローズ (Marie Rose Paupy)

マルチネ長女 十通

・アルフォンス・ド・シャトーブリアン

(Alphonse de Chateaubriant) 五通

・ルネ・アルコス (René Arcos)

四通

ロマン・ロランからの手紙は、ロラン全集「日本人への手紙」に大半収録されている。蛭原徳夫氏訳で、上田の人柄を偲ばせる部分を抄出してみよう。

○一九二八年十月十八日尾崎喜八あて

私たちは上田に二日間だけ会いました。——われわれはみんな彼を愛しています。われわれはみな彼の容貌や態度や精神のこまやかさと、彼の気品の高さにと打たれています。——けれども不幸なことに、彼と話をすることが非常に困難だったのです。

○一九二九年一月十七日上田秋夫あて

妹と私はよくあなたのことを考えています。あなたがパリで孤独でいられるだろう(親しいマルチネのそばにいらつしゃつても)と考え、またこの頃のような冬の陰気な日にあなたはしばしば心を凍らせていられるだろうと、考えています。そう考えると私たちは悲しくなるのです。あなたは若くてけなげな魂の持ち主ですが、憂愁につつまれているように感じられます。私の思想の息吹きが少しでもあなたを暖めてさしあげられたらと念じるのです。……私は最後まで頑張ります。場合によっては万人に抗する一人になります。まずその一人の人間になることです。おのれ自身であるところの人間にです。……

○一九二九年九月二十五日上田秋夫あて

あなたの純粹で、克己的で愛すべき姿を、私たちがいつまでも心に深く忘れずにいる、ということをお疑いにならないでください。……

○一九二九年十一月十四日宮本正清あて

マルチネの言う「やさしい秋夫」から私たちの消息

をお聞きになったことと思います。彼は私のオリヴ
イエや私のアエルトの、日本人の弟です。彼のうち
には優雅さや、つつしみや、貴族的な憂愁さがあり
ます。私たちは彼を深く愛していますし、健康が回
復すればよいがと念じています。

マルセル・マルチネの手紙が多いことは注目すべきで
（マルチネは上田をジャン・ド・サンブリの兄弟と呼
ぶ）、ロラン一八六六年マルチネ一八八七年、上田一八
九九年生れと、その年齢から父、兄、弟の年齢関係から
生じる愛情を感じさせる。しかもロラン、マルチネ共に
一九四四年に死去し、同郷の友、片山敏彦を一九六一
年に失うので、上田はただ一人で残る四十年余を生き抜
かねばならなかった。

雑誌「新しき村」「生長する星の群」「生活者」に寄稿
していた上田は第一詩集「自存」を一九二六年に出版す
る。亡き母に捧げられていて、その序で、

これはロマン・ロランのいう「すべてを在るがま、に
見、且つ愛する」道を得た内面的記録である。詩は一
つの祈りである。欣求である。憎しみと虚偽との世界

の流れの中の鳥である。かくれている「聖思」の火花
である。「心から心へ」、星から星へ飛ぶものである。
……「理想主義者」であるよりも一人の「靈魂主義者」
である……

と述べている。一篇の詩をとり出そう。

樹

静かな夜明の光の中に
ひとりたっているのは樹だ。

暗い真夜中に不思議な歌をうたっていた樹だ。

深い魂の泉からひびいて来る波音だ

宇宙の中の最も深いものを吸う息吹きだ。

純潔な風をつむぐ軸だ。

神聖な黙示の指だ。

この詩集を日本語のまま、題のみ「Ce qui est」と訳して
ロランやマルチネに詩人は送った。「自存」こそ上田の
生涯の在り方を示す道であった。

波仏中も雑誌への寄稿は続いている。特に「生活者」
昭和四年一月号に投稿した「マルチネの戯曲」はマルチ
ネ戯曲のホットニュースであって、大正十五年「築地小

劇場】第三卷十一号に「Marcel Marinet」を書いた尾崎喜八の文章に応答している。上田は付記として

直情なレオン・トロツキーはロマン・ロランがスイスにいて「争いを超えて」いるというので特に非難しているが、ロランこそ「独裁者も、暴力も、右翼も、左翼も知らない」のでは決していない。ロランが今、殆んど稿を終えようとしている「ラマクリシュナとヴィヴェカナンダの福音」は争いのなかでの新しい光でなければならぬ。

の文を書いている。また「生活者」昭和四年八月号寄稿の「アンデバンダン」は、いかにも上田らしい芸術的な感想文で、死まで描き続けたクレバス画、バステル画の色彩の豊かさ、色彩の愛らしい暖かさ、繊細な筆触等、芸術家上田秋夫の感性は、この滞仏中、本物との接触によって十分に磨かれたことであろう。

昭和四年秋に帰国した上田は翌五年「マルチネ詩選」六年「続マルチネ詩選」を出版する。「マルチネ詩選」の表紙は昭和四年、マルチネより寄贈された「Les Temps Maudits」（呪われた時代）の表紙を使っている、

F・Mのサインからフラン・マズレールの木版である。

【続マルチネ詩選】の表紙はマルチネの「L'Annie」（夜）の最終頁を飾るガストン・パスツレのテッサンで、階段をあがる女主人公マリエットが「アンヌ・マリ、起きるときが来たよ、夜が明けたよ」と訴える姿である。（一九二六年十一月築地小劇場において、戯曲「夜」（佐々木孝丸訳）は山本安英がマリエットを演じた。）

【マルチネ詩選】より訳詩一篇、

星

星よ、海の広い夜の中に孤りいる火よ、

折重った浪の上の目に見えない浪が

なんのざわめきもない五月の生温い夜の

星よ、人間のさまよえる心への忠実な呼かけよ

天体の干潮と満潮にのって流転する星よ、

黒い深淵のなかで唯一つの金色の点によって

事物の公正と美とを刻みつけるものよ、

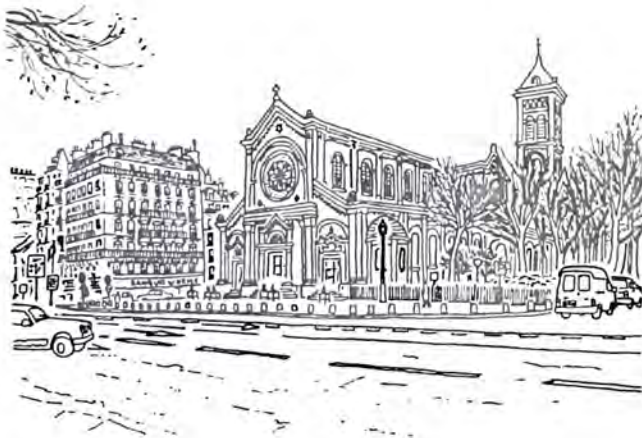
やがて私の心がおんみを憶い出すその時は

近づいている。

昭和六年には詩集「五月柱」を幸子夫人、感想集「薔薇窗」を父への献辞とともに出版した上田は七年に高知に帰省して印刷会社「新生社」を設立する。洋館の書斎のある唐人町の家は学生インテリの憧れであったらしい。投獄された毛利孟夫氏は上田邸での日々は人生の小春日和であったと私に話されたことがある。十一年には雑誌「鉾脈」も名前がいかかわしく、左翼の若者たちが関係したかどで没収、幻の雑誌となった。その後昭和三十一年まで高知新聞社に勤務し、詩選者として高知詩壇のために尽くされた。制限枚数の中で詩人上田秋夫の青春を中心に述べてきた。

上田秋夫先生をお訪ねするたび、かならず先生は書斎で詩を書き、画を描いていられた。ご不在の時は一日もなかった。清雅な雰囲気包まれ、魂が清澄になってはいいつも辞去するのであった。目利きでいられたから、展覧会のお供をして批評のお言葉や詩のように感じて私はメモを取っていた。「日本的な清楚さに魅せられながら西欧の深さに惹かれ」て先生は、その長い生涯を歩まれた。六女いつ子さんが、ふと私に洩らした一言――

「父ほど心の綺麗な人を他には知りません。――と。残された書籍の間には、押し花や、押葉が挿まれている。一体、何十年前の、どこの国の花かしら。」



ロマン・ロランの住居があった
モンパルナス大通り89番地辺り

ベートーヴェンで死ぬことについて

浜田 陽

1 このテーマについて

どんな音楽を聴きながら死にたいか？ こういう問いかけをしてみたことがあるだろうか。そんなとき、西洋音楽では、ベートーヴェンがその知名度からも人生の師というイメージからも取り上げられることが多い。しかし、最近では、音楽学者からの脱神話化の研究などもさかんで、ベートーヴェン像も変わりつつある。そこで、ベートーヴェンを聴いて死ぬことについて考えてみたい。はたして現代人は、そして日本人は、ベートーヴェンを聴いてあの世へいけるのだろうか？ ベートーヴェンで死ぬのだろうか？

2. ゲーテとロランのベートーヴェン

ベートーヴェンの音楽の特徴は、どこまでも自己拡大していかうとする運動と、その運動にうち負けることなく明確なフォルムをあたえ続ける強固な意志であるといわれている。この二つの特徴のうち、「運動」のほうにゲーテが、「意志」のほうにロマン・ロランが、特別な注意の目を向けたと思われる。二人は、どちらもきわめて深くベートーヴェンを理解した人物である。しかもゲーテがベートーヴェンを理解しなかったという当時の風説を、書簡や日記等の綿密な実証研究でくつがえしたのが、ロランがベートーヴェンを熱愛したのにたいし、当のゲーテはどうしてもその音楽を愛せなかったようである。

このようなゲーテとロランの態度の違いは、かれらが生きた時代の差からも考察できよう。ゲーテの頃は機械文明はまだ存在しなかったが、ロランはそれが現実化した時代に生きていた。つまり、ベートーヴェンの同時代人ゲーテは、その音楽の行く末に、異常な自己主張の危険と、その精神が物質化した蒸気機関の轟音（機械文明）

とを鋭く察知し、知性が制御しえないものとしてしりぞけてしまった。(2)ところが、機械文明の存在があたりまえな時代に生きたロランは、ゲーテとは逆にそうしたベートーヴェンの「運動」をさほど気にすることなく、英雄が自然や運命に打ち負かされた果てに勝利に至るといふドラマをその「意志」のほうに苦もなく見い出せたと思われるのである。事実、ベートーヴェンは第一次、第二次大戦に抗するロランの平和運動の守護神でありつづけた。

3 現代人のベートーヴェン

しかし、二〇世紀も終焉をむかえ、われわれ現代人は、ゲーテともロランとも異なった立場で、ベートーヴェンに対面している。現代人は、ナチスやヒロシマをはじめ第二次大戦の経験以降、もはやベートーヴェンの時代の人間のようにユートピアの実現を単純に描けなくなってしまった。また、環境破壊等の危機的状況からも、限度をもうけない自然搾取などの近代的システムの矛盾が露呈してしまった。さらに、機械文明はすでにエレクトロ

ニクス文明に変貌し、ベートーヴェンの「意志」による制御でなくコンピュータによる自動制御がなされている。これらの条件下では、ベートーヴェンを聴くことの意味が違ってきて当然である。

4 ベートーヴェンの聴き方

私は、現在のわれわれのベートーヴェンの聴き方には、1バックミュージック、2祭り、3回想、4パロディの四つのタイプがあるように思われる。

1は、「エリーゼのために」やピアノソナタ「月光」第二章のような有名な聴きやすい曲をムード音楽として流すこと。今はベートーヴェンに限らずクラシック全般にこうした聴かれ方が多くなった。ただし、シンフォニーのような長大で起伏の大きいものは、これには向かない。

2は、大阪城ホールの「一万人の第九」が典型的。毎年、決まった時期にくりかえされ、演奏する側も聴衆も、一体となって生活のエネルギを発散させる。そして、そこでは第九シンフォニーの描く単純な人類共同体のユ

トピアが支持される。また、第一次大戦時、ドイツ人捕虜によって第九が日本で初めて演奏された徳島県鳴門市で、演奏会のアンコールに突然第九が阿波おどりのリズムに変わり、合唱団が舞台上で「エライヤッチャ、エライヤッチャ」「踊らにヤソンソン」と、盛り上がったという面白い話もある。(3) ベートーヴェンの土着化、祭りとの出会いの一例として考えられる。

3は、ロラン以前の時代にタイムスリップしたような気持ちになりきって聴くこと。蒸気機関車SLのファンのようにベートーヴェンに浸る。ベートーヴェンの偉大さをよりよく味わうために、今日感覚ではむしろおとなしく聞こえる十八世紀編成のオーケストラの音響を、わざと轟音として聴きたくて、ヘッドホーンをつけボリュームを最大にする。(そんなことをしなくても、じつは現代では、テレビや街中でいくらでも騒がしい音を聴くことができるのだが。)

そして、4は、たとえばロシアの映画監督タルコフスキの作品「ノスタルジア」での第九シンフォニーの使われ方などがそう。映画は、核戦争による壊滅の危機が

背景となる。そして、狂った老人が狂人たちの見ている前で、「自分たち愚かなるものがあなた方に話しかけなければいけないことは恥ずかしくないか」と叫ぶ絶望的なシーンのバックに「歓喜の歌」が鳴る。ロランのベートーヴェンとはまったく対照的に、狂人(狂わされた一般人)の(必ずしも勝利とはいえない)殉教があり、パロディ化されたボロボロのベートーヴェンがある。それは個人の魂を超えた、人間の共同体自体が発している声、祈りえない状況でのぎりぎりの祈りという感じがまさにする。(4)

第二次世界大戦後、ナチスや核兵器を経験したあとでは、ベートーヴェンのユートピアが簡単に実現するとはもはや信じ難い。それでも、人間としてなんらかのユートピアに憧れざるをえない。そういう、屈折した心理が西洋の戦後の多くの芸術家のベートーヴェン解釈をパロディへと導いている。

5 ベートーヴェンで死ぬるか？

生演奏され、CDで聴かれ、コマージュナルに使われて、

以上のほぼ四種類のベートーヴェンが、現在、世界のあちこちで、鳴っている。もちろん、決まった一つのタイプだけに紋切り型に分類されるのではないが、クラシックに特別詳しくない一般の人は、1や2の傾向が強く、クラシック通は、3、4の傾向が強いのではないかと思われる。そこで、ベートーヴェンの音楽を愛好し、人生の大切な節目でベートーヴェンを聴き、できれば、死ぬときにもベートーヴェンを聴きたいと思っている人がいる場合、その人が1、4のどのタイプに近いかによって、死を看取る音楽の意味も当然変わってくると思える。

1や2のタイプの愛好者は、ベートーヴェンの音楽の印象的なメロディーや覚えやすいリズムなどを巧みに日常生活にとりこんでいて、自分たちのほうにベートーヴェンを近づけている。そのため、死ぬときには、ベートーヴェンの音楽を、今までの人生をふりかえるための、記憶の倉庫の扉をあける鍵としてもちいそうなのがす。そこでは、ベートーヴェンの音楽の本質が大部分切り取られてしまっているため、ベートーヴェンを聴いて

死ぬことに固有の意味はあまりないのではないだろうか。どのジャンルの音楽でも親しまれるうちに、こうした機能を共通してもつようになるため、他の音楽でも代替できるからだ。

私は、どうしてもベートーヴェンで死にたいという人には、3のタイプの人が一番多いのではないかと思う。ベートーヴェンは、苦悩を突き抜けて歓喜に到達した精神の英雄だ。彼の音楽は、平和の象徴だ。だから、人生の最期にベートーヴェンを聴きたい。そういうメンタリティ。今思うと、私自身、高校から大学のはじめにかけてこのタイプのリスナーだった。しかし、もし、このタイプの人が時代の変化をシャットアウトし一人閉じ籠って、ただベートーヴェンにのみすがらるなら、それは不幸なことかもしれない。英雄的な死をとげようとして、時代錯誤の一人芝居を演じてしまう危険がともなうからだ。

6 ベートーヴェンと無常感

そこで、ベートーヴェンの音楽の特徴を理解しつつ、

意味ある死をとげたければ、どうしても第四のタイプに近いところからのアプローチになるのではないかと思われる。「ノスタルジア」の狂人のように、救われないと絶望しつづ、それでもベートーヴェンを聴いて死ぬ。決して英雄的行為ではなく、ぎりぎりのところでの叫びだが、ベートーヴェンの音楽は、かえってリアルに鳴り響くのではないだろうか。タルコフスキーがこの映画を作った頃とちがい東西冷戦は去ったが、激しい地域紛争や改善されない環境破壊など、現代が危機的状況にあることは変わっていない。

近代文明の限界にベートーヴェンの限界を重ねる感受性が自然にそなわっていた西洋人と異なり、戦後の日本人は、むしろベートーヴェンの「運動」や「意志」を、経済成長の達成に邁進するメンタリテイに近いところで、とらえてきたようである。しかし、もし、4のパロディの感覚と唯一対比しうるものとして、仏教を受容した日本人が近代以前から培ってきた無常の感覚、悲哀の感覚を現代においても挙げることができるなら、そうした無常感から逆説的にベートーヴェンが受け止められた

時にはじめて、ベートーヴェンを聴きながら死ぬことの意味が、日本の土壌で深化するのではないか。そしてベートーヴェンであの世へいけるのではないか。

あるいはもはや、無常感もベートーヴェンも二十世紀に生きる人の死に、かわることはなくなっていくってしまうのだろうか。

註

(1) ロマン・ロラン全集23「ベートーヴェン研究I」

みすず書房、一九五九年より

「ゲートとベートーヴェン」片岡美智訳 一九五二年

(ロランの原本出版は一九三〇年)

(2) 「ゲートの耳」中沢新一著 河出文庫、一九九二年

では、ゲートがベートーヴェンの音楽に蒸気機関の轟音を予感したとする興味深い考察がある。

(3) 一九九三年六月七日 朝日新聞(大阪版) 朝刊、

二三頁

(4) 一九八三年イタリアで制作。狂人の友人である亡命中の音楽家が主人公。大江健三郎は「新しい文

学のために」一九八八年、「オペラをつくる」武満
徹と共著 一九九〇年（どちらも岩波新書）のなか
で、「ノスタルジア」の第九の鳴るシーンについて
言及している。

■その他の文献

- ・「ロラン⇨マルヴィーダ往復書簡、一九九〇年—一九
九一年」南大路振一訳 みすず書房、一九八八年
- ・「モーツァルト・無常という事」小林秀雄著 新潮文
庫、一九六一年
- ・「ベートーヴェンの手紙（上）」小松雄一郎編訳 岩波
文庫、一九八二年

※この文章は、ロマン・ロラン研究所での第一七三、一
七四回読書会での発表をもとにまとめたものです。

（京都大学大学院生・一九九六・一・二四）



パンテオン

阪神大震災によって

再びロマン・ロランと……

鳥谷亜希

ロマン・ロランは、私にとって長い間の憧れの“遠い人”であったように思う。

十代の後半から二十代にかけての私は病気で寝たり起きたりの生活であった。当時結核は大気・栄養・安静以外に治療の方法はなく、中には手術をする人もいたが結果はあまり芳しくなかったようだ。とにかく何かをしようとしてもすべていけないと云われ、ただじつと寝てさえいれば周りの人達も安心してという状況の中で、友だちが色んな本を持ってきてくれて片っ端から乱読していた。しかし結核は伝染病であり、なおりにくく、恐れられていたし、人々から嫌われる病気だったので患者は誰もひっそりと生きていたような気がする。友だちが

好意で本を貸してくれるのにも何かすまない思いがしてきて、いつの頃からか自分で買うようになった。その中に「ジャン・クリストフ」や「魅せられたる魂」があったのだ。ひとりっ子だったので病氣のことで気を遣う兄弟もいなかったということもあって、永い病床生活にうんざりし乍らもそれまでは割合のんびり過ごしていた私だったのだが、いつまでもこんなことをしては人生の落伍者になってしまう。たとえ病氣であつてもしっかりと自分の道をつくって生きていかねばと、何事にも一歩退つていたこれまでの生き方を積極的な姿勢に変えていく事をその時から考えるようになった。幸い体の方も大分回復してきて少しずつ社会との交わりを始めるようになったのだが、ずっと家の中にとじこもっていた私には外の世界は珍らしく、新しい出会いもあって色々のことに忙がしく過ごしている間にロランとはいつしか遠ざかってしまった。しかし心の奥にはいつもロランは存在していて、いつの日かじっくりロランの事を学んでみたいという思いは持ちつゝけていた。

そんな所へ昨年のある大震災である。私の方は激震地

から少し外れていて建物は何とか無事だったし、中は倒れ落ちた家財道具で足の踏み場もない有り様だったが私自身幸い怪我もなく済んだ。しかし御影では叔母や従妹達三人が亡くなり、地震は私からさまざまのものを奪い生活は一変してしまった。

ともすれば暗く沈んでいくその後の明け暮れであったが、或る日の新聞でロマン・ロランセミナーの活字が目にとび込んできた。そうだ、私にはロマン・ロランがあったのだ。どうしてそのことを考えなかったのか、地震までは新聞で時々見ることはあったものの仕事で出かけられず仕方なく諦めていたのだった。

私から多くの大切なものを獲っていった地震だがロランは持つて行くことが出来なかった。私にロマン・ロランがよみがえってきたのだ。

神が私に残しておいて下さった此の贈り物に感謝して一からまた読み返し勉強を始めていこう。困難をのり越えて生きぬいていく勇気をロランから与えられた昔の自分に戻ってこれからの人生に今改めて意欲をもやしている。

(ロマン・ロランセミナー参加者)



モンパルナス大通り

| | | |
|--------------|---------------------------|-------------|
| 1991. 10. 25 | ロマン・ロランの思想の二面性 | 兵藤正之助 |
| 1991. 11. 29 | 初めにロマン・ロランあり | 岡田 節人 |
| 1992. 1. 29 | 自伝的諸作品について | 佐々木斐夫 |
| 1991. 6. 26 | 〈大洋感情〉と宗教の発端 | 岩田 慶治 |
| 1991. 9. 25 | ロマン・ロランとイタリア | 戸口 幸策 |
| 1991. 10. 30 | ロマン・ロランの革命劇をめぐって | 鶴見 俊輔 |
| 1991. 11. 27 | 宮本正清 没後十年記念追悼会 | ピアノ演奏：山田 忍 |
| | 静かにやさしき顔 | 佐々木斐夫 |
| | ふしぎな静けさ—宮本正清の世界 | 小尾 俊人 |
| 1993. 1. 29 | ロマン・ロランの演劇的世界 | 石田 和男 |
| 1993. 5. 24 | ガンディーとロマン・ロラン | 山折 哲雄 |
| 1993. 6. 23 | 『魅せられたる魂』を語る（前） | 重本恵津子 |
| 1993. 10. 15 | 『魅せられたる魂』を語る（後） | 重本恵津子 |
| 1994. 1. 28 | いま、ロマン・ロランを語る | 尾埜 善司・今江祥智 |
| 1994. 9. 9 | ロマン・ロランと音楽 | 中野 雄 |
| 1994. 10. 14 | 神秘と政治—ロマン・ロラン、その思索と行動のあいだ | B. デュシャトレ |
| | ロランとフランス革命 | 河野 健二 |
| | 自然科学とゲーテ | 岡田 節人 |
| 1994. 12. 3 | ロマン・ロランとドイツ音楽 | 岡田 暁生 |
| | —ベートーヴェン、デュカ他作品 | ピアノ演奏：小坂 圭太 |
| 1994. 12. 24 | おはなし「ビュールとリュス」と「また逢う日まで」 | 今江 祥智 |
| | 映画上映「また逢う日まで」（監督 今井 正） | |
| 1995. 1. 27 | ロマン・ロランと日本人たち | 小尾 俊人 |
| 1995. 6. 2 | わたしの歩んだフランス文学の道 | 片岡 美智 |
| 1995. 11. | ロマン・ロランとR. シュトラウスの周辺 | 岡田 暁生 |

月例会の《読書会》は174回（日本ロマン・ロランの友の会時代から数えると349回）を迎えます。「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」をはじめ、ロランの諸作品を、読んでまいりました。1992年からは「ロマン・ロランと音楽」をテーマに神戸大学助教授岡田暁生氏を講師に自由な雰囲気です。

ロマン・ロラン研究所の活動

財団法人ロマン・ロラン研究所は、ロマン・ロランの翻訳と研究に生涯を捧げた元・大阪市立大学教授 宮本正清（1898～1982）の私財を主に1971年4月、設立されました。

ロランの一国家一民族にとらわれない全世界、人類のユニテと調和をめざした人間愛の思想を、後世に遺したいという強い願望から生れたものです。これまでの重要な活動である公開講演等は次のとおりです。（敬称略）

| | | |
|--------------|-------------------------------|----------------|
| 1971. 5. 15 | ロマン・ロランと日本の青年（映画『ロマン・ロラン』上映） | 宮本 正清 |
| 1971. 11. 27 | 苦悩のなかのインド | 森本 達雄 |
| 1972. 6. 24 | ロマン・ロランとフランス革命 | 波多野茂弥 |
| 1973. 5. 26 | ロマネスク美術 ブルゴーニュ地方の教会を中心に | 高井 博子 |
| 1973. 12. 18 | 私の人間観 | 末川 博 |
| 1974. 6. 29 | 私の通った芝居の道 | 毛利 菊枝 |
| 1974. 12. 5 | ロマン・ロラン没後30周年記念—講演と音楽の夕べ | 佐々木斐夫 |
| | | 演奏：玉城 嘉子 |
| 1976. 7. 11 | ロマン・ロランとゲーテ ユダヤ民族と西洋文明 | 南大路振一 岡本 清一 |
| 1977. 2. 10 | 中国文学とロマン・ロラン | 相浦 杲 |
| 1989. 4. 20 | ロマン・ロランの反戦思想と現代 | 加藤 周一 |
| 1989. 6. 9 | ロマン・ロラン全集と私 | 小尾 俊人 |
| 1989. 9. 29 | ロマン・ロランの革命劇から—フランス革命200周年の記念に | 中川 久定 |
| 1989. 11. 17 | ロマン・ロランとの出会いから | 尾埜 善司・今江祥智 |
| 1990. 1. 27 | ロマン・ロランに負うもの—平和と音楽 | 新村 猛 |
| 1990. 6. 2 | ロマン・ロランとガンディー | 森本 達雄 |
| 1990. 9. 26 | 『魅せられたる魂』と私 | 樋口 茂子 |
| 1990. 10. 26 | 占領時代における日本社会とロマン・ロラン | 小尾 俊人 |
| 1990. 11. 30 | ロラン・片山・ヘッセ | 宇佐見英治 |
| 1991. 3. 1 | ロマン・ロランと私 | 松居 直 |
| 1991. 6. 4 | ロマン・ロランとベートーヴェン | 青木やよひ |
| 1991. 9. 27 | ロマン・ロランとデュアメル | 村上 光彦 |

感謝 1995年度

賛助会員、寄付者名簿

(アルファベット順・敬称略)・特別会員

- | | | | | | | | |
|------------|--------------|--------|-------|-----------------|-------|-------|-------|
| 有馬通志子 | 蘆田ひろみ | 浅井 幸 | 芦田 友秀 | 大谷佳世子 | 李 修京 | 千 登三子 | 佐々木斐夫 |
| 安倍 道子 | プリューネ・アンドレ | | | 三友居・社長 | 山本 勝 | 坂谷 千歳 | 佐藤ミサエ |
| シッシユ・D・由紀子 | 出口 治男 | 浜田美智子 | | 佐久間由紀子 | 篠原孝子 | 志賀 鍊三 | 杉本千代子 |
| 福井 友栄 | 福田万紗子 | 福岡 美彦 | 古家 和雄 | 杉本 峯子 | 鈴木 文代 | 佐川 一郎 | 新宮恵美子 |
| ・本郷美智子 | 林 次郎 | 日野二三代 | 樋口 茂子 | 杉田 谷道 | 田中阿里子 | 田代 輝子 | 高橋佐多子 |
| 石丸 啓子 | ・稲畑産業株式会社・社長 | 稲畑勝雄 | | 谷口 良則 | 多田 淳子 | 谷口 良三 | 美穂 |
| 井土 熊野 | 井土 真杉 | 乾 昌明 | 岩坪嘉能子 | 千阪 靖朗 | 梅原 ふさ | 上田なほ子 | 氏家 玲子 |
| 加藤 澄子 | 狩野 直禎 | 清原 章夫 | 喜多 寿子 | 宇佐見英治 | 安田 俱子 | 山下 雅子 | 吉原 圭子 |
| 近藤 正雄 | 河田 厚公 | 木之下洋子 | 熊木 秀雄 | 山本 信子 | 八木美佐子 | 山口 善造 | 山下 真子 |
| 小牧 久時 | 栗林 弘 | 松居 直 | 宮内 幸子 | (一九九六・一月三十一日締切) | | | |
| ・みずず書房・社長 | 小熊勇次 | 美木 陽子 | | 計(一、二五五、〇〇〇円) | | | |
| 前田 政昭 | 本野 妙子 | 森内富美子 | 森 忠一 | | | | |
| 森本 達雄 | 宮本エイ子 | 森久 光雄 | 虫賀 宗博 | | | | |
| 成田 雅美 | 西村喜代子 | 西原久美子 | 永田 和子 | | | | |
| 西成 勝好 | 野村 庄吾 | 鍋谷 郁二 | 中津 雅野 | | | | |
| 野口 榮子 | ・小尾 俊人 | 小田 秀子 | 折田 忠温 | | | | |
| 大出 學 | 落合 孝幸 | 大川起示子 | 岡部 素行 | | | | |
| 奥 和義 | 奥 彦徳 | ・尾埜 善司 | 大谷 史朗 | | | | |

あとがき

昨年末、バブル経済崩壊の我が国に大きな鉄槌が加えられる大事件が相次いでいる。ある協会でその一年を代表する一字が選ばれる。昨年の第一位は「震」であり、続いて「乱」「災」「恐」「激」「怒」となっている。阪神大震災は言わずもがな、サリンばらまきにはじまる一連のオウム報道や高速増殖炉のナトリウムもれで安全信仰が基底からおびやかされている。相次ぐ金融不祥事は今も住専処理・倒産など危機を脱したとは言えない。心が痛み、震え、乱れることがあまりにも多かつた。

戦後五十年積み積った様々のツケがまわされてきた。水俣やHIV感染問題などその一部は解決されたかのように報じられている。だが本質的な心の苦痛は残されたままではないか。

私たちはみかけだけの自国の繁栄に身を奪われ、「世界の苦悩」を忘れていたのではないだろうか。その苦悩は今日、今の時刻でも弱者をおそい痛めつける。旧ユーゴスラビアやイスラエルや、旧ソ連・チェチェンにおける民族抹殺だけではない。フランス核実験・沖縄米軍の存在など大国の横暴が苦悩を生み出す。さかのほれば日本の過去の侵略戦争によつてもたらされた従軍慰安婦問題をはじめアジア諸国の傷跡すら癒えているとは思えない。

私たちは戦後五十年、その苦悩を未解決にして、目先の自分の幸せだけを追ってきたツケが今ここにつきつつけられ、やつとその傷と苦悩に気づきはじめている。

「……耳を立てて聞け！ おまえはそこに海のどろきを聞くだらう。海全体が一滴一滴の中にあるのだ。あらゆる苦悩がそこに反射している。もしもその一滴が、聞くことを欲したなら！ ……ここへおいで、うつむいてごらん！ わたしが渚で拾った、水のしたたる貝殻に耳をつけてごらん！ ひとつの世界がそこに死滅しつつある……」

しかし、自分はまたそこに、すでに、嬰兒が泣くのを聞く。」

〔魅せられたる魂〕五 予告する者より

こうした一年、震・乱・恐の一年をくぐり抜けて、今年もささやかなこの一小冊子「ユニテ」二十三号を発行することができてうれしく思います。と同時に、水のしたたる貝殻に耳をつけて、苦悩を聞きとり、死滅する者と生れいずる者の声を聞きとりたいと思います。

「平和を迎えに歩んで行こう！

わが友、わが妻、わたしはおまえにわたしの傷をささげる。それは人生がわたしにあたえた最良のものである。

なんとなればそれはいずれも一歩前進したしるしだから。

一九三三年九月 ロマン・ロラン

一九九五年という年におきた様々の心の苦悩を、私たちは今後も語っていきたいと思う。

(野村庄吾)

ロマン・ロランセミナー、講演会内容を収録するにあたりまして、先生方から原稿をいただきました。小尾氏の「ロマン・ロランと日本人たち」は昨年度「ユニテ」22号に続くものです。

ロランと親交を結ばれた詩人・上田秋夫氏が昨年、九十六歳でその天寿を全うされました。心から御霊のご平安を祈ります。先生の追悼をご縁の深い永田さんにお書きいただきました。

はからずも今回、ロランと会う機会に恵まれた落合氏に、その想い出をお寄せいただくことにも恵まれました。

ロマン・ロランセミナーの熱心な参加者からは二編。

一つは浜田氏（宗教と社会の関わりを研究）が読書会での報告を掲載。

もう一編は島谷さん。阪神大震災によつて、ロランを再発見された経緯を厳しい情況のなかで、あえてお書き願いました。

カットは続「パリを歩きま専科」（関西大学出版部）から、著者、乾氏から転載のご快諾をいただきました。

それぞれバラエティ豊かな七編にパリの精密画を加えて編むことができましたことを、ご協力下さいました各位に深く感謝申し上げます。

たえず、「ユニテ」をご愛読下さり、お励しのことばをおかけ下さいます皆様方に謹んで御礼申し上げます。ご意見、ご感想をお寄せいただければ、なお大きな幸せでございます。（E・M）

ユニテ部

小尾 俊人

野村 庄吾

西村 明

宮本エイチ

表紙 装丁

カット

小尾 俊人

乾 昌明

ユニテ 第二十三号

発行日 一九九六年四月十五日

発行者 (財)ロマン・ロラン研究所

理事長 尾 埜 善 司

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話・FAX

(〇七五)七七一―三二八―

郵便番号六〇六

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九一五九九九六

印刷所 (有)恒 星 社

Handwritten musical score for a vocal line and piano accompaniment. The vocal line is on a single staff with lyrics: "deux fois", "don", "ce. le. be. stien". The piano accompaniment is on two staves. The music is written in a simple, sketchy style.

Handwritten musical score for a piano accompaniment. The music is written on two staves. There is a handwritten note "Finis le 11 mai 1915" written across the staves.

Two empty musical staves, one above the other, with a brace on the left side.

Two empty musical staves, one above the other, with a brace on the left side.

(Für den westfälischen Frauen)

Festlich bewegt

Handwritten musical score for the first system. The vocal line (treble clef) contains the lyrics: "durch aller Bäume Klang der Farn: o. der aus in Kachel sich unser Sang". The piano accompaniment (grand staff) features a melody in the right hand and chords in the left hand. The key signature has one flat (B-flat), and the time signature is 2/4.

Handwritten musical score for the second system. The vocal line (treble clef) contains the lyrics: "auf der ma Bah: am Man ist für gar nicht lang". The piano accompaniment (grand staff) continues the melody and accompaniment. The key signature and time signature remain the same as in the first system.

Handwritten musical score for the third system. The vocal line (treble clef) contains the lyrics: "in die la den die Lenz de. den Lenz Lenz". The piano accompaniment (grand staff) continues the melody and accompaniment. The key signature and time signature remain the same.

Handwritten musical score for the fourth system. The vocal line (treble clef) contains the lyrics: "den Lenz be: rian die Lenz de den". The piano accompaniment (grand staff) continues the melody and accompaniment. The key signature and time signature remain the same.